



2017. May  
第17・18号合併  
(スペシャル号②)

一般社団法人日本演出者協会 協会誌「ディー」

題字 千田是也

新劇の代表的演出家・千田是也氏の文字をロゴデザインに使用。  
(資料提供/早稲田大学坪内博士記念演劇博物館)

特別鼎談 『協会の使命』

和田喜夫×宮田慶子×流山児祥

Contents ■■

- 特別鼎談 和田喜夫×宮田慶子×流山児祥 『協会の使命』……2
- 若手演出家コンクール2016……6
- 若手演出家コンクール2015 最優秀賞受賞記念公演……9
- 在外研修報告……9
- 演出家・俳優養成セミナー 演劇大学2016……10
- 国際演劇交流セミナー 2016……14
- 日本の近代戯曲研修セミナー2016……17
- 近代豆知識……18
- 演出者の集い2016……19
- アンケート「演出者の仕事」……22
- 総会報告……24 ■ 事業担当者名簿……24
- 理事会報告……25
- 各地域活動通信 被災地特集……26
- アジア青空劇場フェスティバル2016 in KURUME……28
- コラム 演出者と法律……29
- 部会だより……30 ■ 新入会員紹介……30
- 退会・訃報……31
- 写真で振り返る日本演出者協会の軌跡……32
- 編集後記……32

一般社団法人日本演出者協会誌「D」(ディー) 第17・18号合併(スペシャル号②) 定価=無料 2017年5月1日発行 平成20年11月創刊(毎年2回発行)

【発行人】和田喜夫(理事長) 【編集人】秋葉由美子(広報部長) 【編集委員】大西一郎/篠崎光正/篠本賢一/三谷麻里子/緑川憲仁/栗原秀一/藤間健  
【鼎談編集】鷺谷憲樹 【鼎談編集協力】吉田奈穂 【発行所】一般社団法人日本演出者協会 東京都新宿区西新宿6丁目12番30号 芸能花伝舎3F(〒160-0023)  
電話03-5909-3074 【編集・制作】一般社団法人日本演出者協会広報部 協会誌『D』編集委員会 【題字】千田是也「Marionetto」より  
【印刷所】有限会社一光堂印刷 【表紙デザイン】前嶋のの 【本文デザイン】鷺谷憲樹

流山児祥

和田喜夫

宮田慶子

理事長と副理事長、それぞれ個性的な視点から見える演劇の現在と未来、日本演出者協会の未来。

## 協会の使命

日本演出者協会広報誌「D」  
特別 鼎談

一昨年に設立55周年を迎えた日本演出者協会。そこで今回の巻頭企画として、理事長である和田喜夫氏、そして副理事長の宮田慶子・流山児祥両氏による鼎談が昨年9月に行われた。

話題は「これまでの協会の活動の変遷（どちらかというと思えば）」から「これからの協会の使命」へと、前向きに膨らんでいった。

### ▼日本演出者協会の誕生

**和田** ■日本演出者協会は、新劇の演出家が社会的・芸術的な地位の確立を目指して1960年に設立、その後、80年代後半にアングラの演出家にも入ってもらおうという流れになった。それまでは敵対してたかもしれないけど、日本全体を考えてね。で、たぶん流山児さんのところに勧誘の連絡がいったんでしょう。あとで我々に千田是也さんから連絡が来たから。

**流山児** ■「新劇のドン」と呼ばれる千田さんと「アングラの暴れん坊」が会うなんて、劇的だった。初めて会った時、俺、千田さんに「あんたが新劇のシーラカンスか？」と言ったもんね。そしたら千田さん、笑って喜んでくれた。で、すぐ理事にされちゃった。（千田さんは）本当に芝居好きの面白いおじいちゃんだと思ったよ（一同笑）。飯倉の家と呼ばれて酒飲みながら「新しい俳優論を書くんだ」とか、東京芸術劇場のこけら落とし公演の舞台稽古と呼ばれたりして、芝居のいろんなことを教えてもらった。唐十郎さんとか寺山修司さんと違った意味で巨人だなと思った。懐も広いし、いろんなことを考えさせられたよ。

**和田** ■アングラも新劇も運動的な要素が強かったでしょ。それぞれ考え方が違うので、ホントに一緒にやれるのかなっていう雰囲気数年間あったかな。

**流山児** ■でも、演出者協会って個人加盟の協会だから、そんな無茶苦茶なことは起きなかった。個人加盟ってことはある種の自由さを持つていてと思う。それと80年代に和さんが事務局長になってから、展開が変わっていった。俺と和さんで、新しい演劇人を育成する為に何をやればいいのか話し合っって、文化庁に行っって。

**和田** ■1997年くらいだったかな。

**流山児** ■あの頃は文化庁も僕らも、新しいことをやろうとしていたよね。国際演劇交流セミナーと演劇大学を企画したり。助成金システムも導入されて、変化の時代だった。

**和田** ■あと若手演出家コンクールもね。たぶん、それまでは助成制

鼎談：協会の使命 和田喜夫 × 宮田慶子 × 流山児祥

### ▼演出家ってなにをやる仕事？

度って無かったと思う。千田さんたちが始めたころは助成が無くて、経営や運営とかが大変だった時期がかなり長く続いた。それでも年に1回の演劇大学や、中国や韓国との交流など、社会的な事業を実施していた。全国的に育成も含めて普及・交流事業をやり始めたのは、99年あたりから。当時は東京中心の考え方が非常に強かったから、全国の演劇人と様々な形で出会うことで演劇の多様性や重要性を確認し合うみたいなことが目標だった。昔は国際演劇交流セミナーを1年間で13回とかね（笑）、めちゃくちゃなことをやってたなと思うけど、とにかく世の中変えたいという意気込みでしたね。

**流山児** ■演出者協会ってなんかオモシロイなってのはあったな。劇作家協会と、お互いの協会が切磋琢磨してたのが90年代。

**宮田** ■私はおふたりとはちよつと違うスタンスですかね。ちゃんと関わり始めたのは90年代の真ん中くらいだと思うんですけど、動機はやっぱり、個人参加の協会だということ。私は新劇の劇団の中でもがいてもがいて「ちつとも芽が出ねえ」「演出はどうやってたら徒弟制度から抜かれるんだ」と言いながら（笑）、ずっと苦しんでいた時代があった。片や小劇場は元気だったから、えり子（現・渡辺えり）さんしる野田（秀樹）さんしる鴻上（尚史）さんしる、同世代がみんなブワツと出ていっっている中で「このまま私は新劇の中で埋もれて死んでしまふんじゃないか」とずっと思ってた（笑）。

**宮田** ■劇団主宰でもなく劇作家でもなく、演出単体のプロパーとしてやってる自分としては「演出家ってなにをやる仕事？」「演出の職能ってなんだ？」と。これが確立できないことを、自分の中でずっと悶々としてた。そんな中で、演出者協会が個人参加だということもすごく嬉しかったんです。演出家が、個人としてなにかに参加できたり表現できたり、演出の専門性みたいなものをみんなが語れる場所があるんじゃないかと期待して入ったんです。それから、あまりにも演出家の横の連携がとれていないから、他人の現場を見ようよって。日本では、西洋のメソッドにしてもスタニスラフスキーシステムにしても、それぞれが伝え聞いたものが伝わっていきうちにまったく変わっていったという、とつても恐ろしい伝言ゲームみたいなことがあって（笑）。しかもそれが全部枝葉に分かれていっるから、みんなが違うメソッドを信じて演劇をやっている。そしてそれを守ることに汲々として、他者を認めることに非寛容（笑）。すごくそういう状況が不健全だなーと思ってたんです。もつとブラットにお互いが話し合っって現場見せ合っって、もつとオープンにいっく場所がないかなと、そんな思いで入りました。

流山児 ■すごいな正統派は、ワハハハ！

宮田 ■なんで？（笑）。自分としては切実だったんですよ、ちゃんと話せる相手が欲しかったから。流山児さんは劇団主宰者で、モノも書いていろいろするけど、私なんて演出しかしてないから、ホントに肩身狭くて。「演劇界でなんの発言権も無いのか」と思ったりもして。「いや、そうじゃない。この職種は職種で歴史は浅いけれども重要な仕事なんだよ。これから特にこの仕事がつとも大事になるよ」ってなんとかアピールしたいと思ってるんです。あと、私が協会に入った頃は、四谷三丁目のおちゃい事務所です。そこにぎっぎちに膝と膝をくっつけ合いながら十何人集まって会議してるの。びっくりした！ だって全員が靴脱いで上がると、ちっちゃな三和土に靴が置けないんだもん。

和田 ■十畳無かったかな。

流山児 ■ここ（芸能花伝舎）に引越す前の話だね。

宮田 ■それで、集まってるメンツときたら、日本演劇界の中核が全員いるみたいな状態でしょう。そこに参加するだけでもとにかくおもしろかった。それからそれぞれに「自分の方法が正しいのかな、いいのかな」と思いながらもがんばっている、いろいろな地域の演出家たちと、なにかを話し合ったりお互い分かち合ったりできるいいなって。地方の演劇を隆盛したいって気持ちももちろんあるんだけど、まずは地方の演出家と喋りたいと思っていましたね。

和田 ■そこは協会が個人加盟であるいばい点だと思う。世代を越えて、ジャンルを超えて、いままで出会うことのなかった人間と出会えたという最初の喜びは相当あった感じがする。それを発展するために、演劇大学の開催地を毎年掘り、いろんな世代と出会い、言葉を聞き、意見を交わしあうことを続けている。そのことで演劇を取り巻く状況を変えることが目標。でも、まだまだ問題は多いですね。

## ▼劇場のある街を

和田 ■「演出」って言葉は存在するんだけど、具体的には印象的なもの、先入観的なものでしかない気もする。舞台だけを演出するのか、社会に向かう場を作るのか。受付も含めてどんな場所を作り、どんな人間関係を作っていくのか、それらすべての演出を考えない

## 「演出」の専門性みたいなものを みんなが語れる場所があるんじゃないか。

【宮田慶子】

と演劇は閉塞する。たいがい舞台上のことだけ考えていくけど、そこに人間と一緒にいるってことが最も重要だと思う。

流山児 ■劇場ってのはなんだろうってことだね。ただの器じゃなく、ヒトとヒトが出会う場所が劇場なんだ。もう一回、その原点に戻らないといけない。なんで演劇はあるんだろう、なにを人に見せたいんだろうってことを真摯に考えないと。

和田 ■確かに長い歴史の中で現代は、自分たちが自分たちのために劇場を作るっていうことよりも、建築家が作った劇場の中でやる率が、全国的に多いわけでしょう。たとえば歌舞伎は自分たちで自分の劇場を作った。「こういうものを上演したい、こういう場を作りたい」と。じゃあ現代は人間の居場所としてそういう劇場を創造できるか。それも演出家の仕事だと思う。各地に行くことやったりいばい問題になるのは小劇場が無いこと。小劇場が重要だって発想は、行政関係者にはあまり無いのかな。

宮田 ■地方にも、奇跡的に行政マンと演劇人の仲が良かったりするところは、とてもコンパクトで理想的な劇場ができていたりするよね。ロケーションや立地条件とかも含めて「ここなら芝居見ようって気になるね」って劇場がときどき地方にはある。残念ながら一極集中と呼ばれる東京は地価が高くて、限られたスペースの中でしか劇場が作れない。やっぱり足を運ぶなくなる劇場っていうのは、実はとても大切なこと。私は老舗の新劇の劇団にいるけど、そこでさえ、作品を決めてから劇場を決めさせてくれって論議は昔からある（笑）。ただ制作部は「そうは言ってもらえませんが！ だとすると2年前に決めなければいけません」って。そんな先の芝居わかるか！ っていう話よくしますね。

流山児 ■それって日本の特殊で異常なところだね。2年も前に劇場を押さえたいといけないんだから。

宮田 ■異常！ まず劇場を決めてから演目が決まってくるじゃないですか。本末転倒だなんていつも思いますよ。

流山児 ■たとえば韓国は公演を1か月やるから、それでなんとか

## いろんな世代と出会い、言葉を聞き、 意見を交わしあうことを続けている。

【和田喜夫】

食っている。テハンノ（大学路・韓国の劇場街）には何百という劇場があって、そこで育てているものってすごく大きいと思うんだよ。下北沢だって劇場が100とか200になれば、それはそれで変わると思うんだ。それだけ演劇を観るお客さんがいるかっていう問題もあるけど。テハンノの場合は大学生が中軸になっているよね。

和田 ■演劇の立ち位置が違うんだと思う。この前、国際演劇交流セミナー韓国特集の講師のバク・クニョン氏から「韓国では演劇人は尊敬されています」って聞いて「え？ 尊敬されてる？」って思わず聞き返してね（笑）。お金がないって言うのとご飯を食べさせてもらったとか、劇場行って「演劇やってます」って言うのと、「入れ入れ。お前は招待で大丈夫だ」って言うような状況があったりとか。

宮田 ■えー！？

流山児 ■それはとっても素敵なことなんです。韓国も台湾もそうだと思う。演劇人は尊敬される存在。日本では「好きでやってらっしゃるんでしょ？」とか「ちょっと斜に構えて世の中に衝突したいんでしょ？」とか。まあ、「そりや当たり前じゃねえか」って俺なんか思うんだけど（笑）。

宮田 ■そこで開き直るからいけないんじゃない？（笑）。

流山児 ■でも乞食だから、もらえるものはもらうけど（笑）。

宮田 ■「いいえ、世の中のためです」ってちゃんと言えばいいのに。流山児 ■そうそうそう（笑）。世の中のため。

和田 ■韓国では小学校・中学校で演劇を勉強していて、2017年からは中学校の必修科目になる。日本ではずっとできなかったことを、韓国はやってるんです。だから、演出者協会としても今後の課題としていきたい。だってオーストラリアの演劇人を呼んだときも「小中高で全員が演劇を習ってる」と。演劇は社会にとって財産で重要なものだとも誰かが思っている国がある。一方で、日本の場合はいまだに偏見があるわけでしょう。明治維新のあと社会的な地位が低いままで、いまでも「河原乞食」なんて言う人がいる。これはもう変えていかなきゃダメだと思ってる。これもバク・クニョン氏から聞いたことだけど、韓国は国の政策として各都市に、小さいけど劇場街を3つ4つ作った。1つじゃダメだ。その結果、「若者たちが街から離れないでいい」って町の人たちが喜んでる。これ、日本でもやれたらとずっと言っていたことなので、ああ実現した国があるんだ……って非常にシヨック！



宮田■理想ですよね。

流山児■カナダでも、フリンジシアターフェスティバルっていう、北米の都市で毎年やる10日間のお祭りがあるんです。そこでツアーをやるよ、演劇人でもなんとか食えていける。それが50年以上続いている。演劇を支えていこうっていうポランテアが各街にいて、演劇っていうのはこうやって街の中に生きてるんだって思える。たとえばバスの運転手さんが「昨日観たぞ」って言ってくれたり。パトカーが来て、俺たちホルドアップされるかなと思ったら車を止めて「昨日観ておもしろかった」って言ってくれたり。そういうことを体験すると、日本でもなんとかして俺たちが生きてる間に、街が「演劇を育ててる」っていう環境になればおもしろいなって思うんだけどね。

和田■そうだよ。劇場も、「私たちの劇場」であるという意識をみんなが持っていて欲しいよね。日本でもできないわけじゃないだろうから、それが今後の課題かな。

## ▼演劇教育「百年の遅れ」

流山児■情報を共有して横へ横へ流していくのは演出者協会の仕事。将来的には演劇センターにしなきゃいけないし、ユニオンにならなきゃいけない。本来「演出家」は職業であって、「日本演出者協会」というユニオンなんだと。労働規則もあるんだというところは目指すべき当たり前の姿だと思っただよ。海外なんかみんなそうじゃないですか。

和田■地方に行くよと演劇をやっている人たちが「演劇は敷居が高い」とか「好きな人が好きなことをやってるんでしょ」とか、そういうことをよく言われている。もしかするとやる側の手法にも問題があって、「演劇らしさ」みたいなものや自分の方法論に囚われているのかもしれない。そのために一般の人から見ると何か遠い……だからユニオンも劇場も含めて、一般の人とのつながりの中の演劇をもう1回考える必要があると思う。その時にやってくる側も、自分には絶対的な方法論を持つてると。これは正しいんだって拘ってしまおうと、さらに遠のくんじゃいけない。それと高校演劇を観ていて思うのは、「大会のために」やっていると多くて、そこには座学がほぼない。だから、かつて世界や日本にどんな演劇があり、今どんな演劇が生まれているか、ほぼ知られていないという残念な現実が生まれている。

流山児■高校演劇のヤバイところは、甲子園大会でプロのスカウトだけが見ているのと同じで、審査員だけが見ていて、観客がいなくてことだよ。あれ相当歪んだ形だと思っ。ど真ん中に審査員がい



宮田 美希 (みやた みき)  
演出家。東京都出身。1980年に劇団青年座入団。創作劇、翻訳劇、ミュージカルなど多方面にわたる作品を手がける一方、演劇教育や日本各地での演劇振興・交流に積極的に取り組んでいる。主な受賞歴に、第29回紀伊國屋演劇賞個人賞、98年芸術選奨文部大臣新人賞、第43回毎日芸術賞千田是也賞、第9回読売演劇大賞最優秀演出家賞など。新国立劇場演劇芸術監督、公益社団法人日本劇団協議会常務理事、一般社団法人日本演出者協会副理事長。

さ。誰のために演劇やってるのかと思うよ。

宮田■よく分かるけど。それきつとバッシング受けるよ(笑)。  
流山児■だっってオカシイじゃん！ オカシイと思わずに何十年もやってるのが異常だっってこの前、審査員やっつた時みんなの前で言っつたんだ。「お客さんいないじゃん、誰に見せてんだよ。演劇は審査員や評論家のための芝居じゃないんです！ 観客のためにあるということをまず忘れてる！」って。大会を悪く言っつるんじゃないや。でもそれを誰もオカシイと思っつてないことが異常ですよ。堂々と書いていい(笑)。

和田■僕が何回か体験した中では、広すぎる会場の中でこの形式は良くないという先生の意見も聞いたことがある。だけど誰かが決定的に変えようっつていう話になかなかならないのはどうしてなのか。協会としても知りたいと思う。演劇大学やっつると高校生も参加してくれて、大会のための演劇だけをやっつるのが非常に辛いという学生が結構いる。それを誰に相談していいか分からないというわけですね。他の国だと学校の中に顧問の先生だけじゃなくて専門家が入っつた方がいいという考えがある。それが健全だよ。

宮田■それが今後の演出者協会の仕事のひとつになっつてくるんじゃないかなと思っつてます。たとえば小学校中学校に演劇教育を入れろっつて言っつても、教科書に載せるだけじゃダメなんですよ。今まで国語の先生なりが見よう見まねで「演劇っつてこんなものらしい」みたいな感じで指導して、「さあみんな、元気な声で揃えて一緒に言いましょ」っつていう授業をされてしまったがために、私は

日本の演劇は100年遅れたと思っつている。でも先生たちは専門家じゃないから可哀想なんですよね。今の若い先生たちは演劇なんか1回も見たことがなくて、演劇っつていうものはテレビを通して知らないわけじゃないですか。だから演技に対する基本的な考え方も分かつてないし……。片手間は無理よ！ ここにこそ専門職が行かないと無理。そのための最低限の、たとえば小学校ではこんなことを、中学校ではこんなことをやっつてみようっつていう規準作りみたいなことがまずあっつて、そこに専門家である演出家や俳優の志のある人や賛同した人たちがテキストを持って学校へ行っつて教えてくれる、みたいなことからできればいいと思っつてますよ。

流山児■それは本当に吃緊の問題で、演出者協会も含めて、政府に対して具体的に提言していくことは絶対にやらなきゃいけないことだと思っつ。

宮田■今までもプロの派遣っつてあっつたように思っつてですけど、無数に枝葉が分かれていく「自分が持つてるメソッド」を持って教えに行っつちやっつたから、オールマイティとは言えなかつた。教わる先生方や学校側がちょっと警戒心を持つっつようになっつたり(笑)。教えに行くときは「独自の表現方法」じゃなくて、一応このスタンダードを教えてっつようっつていうことができればいいと思っつてるの。流山児さんも私も、演劇大学とかで教えることは大体似てる。世の中では、全然手法が違うふたりと思っつていけるけど、なんだ演出してみたら似てるじゃないかっつて。というところは、そこからスタンダードを見出せると思っつてますよね。なんか演劇っつていうことが間違っつてとらわれて、演劇嫌いを育てるみたいなのも虚しい悪循環が起っつらないためにも(笑)、最低まず、みんなと一緒にやることを楽しもうとか、台詞を口に出してっつてみることを楽しもうとか、別のものになっつてみることを楽しもうとか、まず3つぐらいで始めればいんじゃないかと思っつてます。

和田■演劇っつて、この人にはこんな考え方があっつたっつて変じゃないんだっつていう価値観の多様性があるじゃない？ だけど単独で教えに行っつて自分のメソッドや思っつてにこだわり過ぎると、確かに弊害が出てくる可能性の方が大きい。  
宮田■多様性を許容できるのが演劇のいいところっつていうのが大前提として、でも小中学校に教えに行く時は、こちら側がもっと大人にならなきゃいけない。「自分を認めて」っつて気持ちで行っつたらダ

僕たちはあくまでも個人なので、フットワークだけはよく、  
ネットワークをどう作るか。

〔流山児様〕



和田喜夫 (わだ・よしお)  
演出家。山口県出身。1982年から劇作家・岸田理生との共同作業を続け、92年オーストラリアのパーズ、アデレード国際演劇祭で『糸地獄』を上演する。01年よりオーストラリアやカナダの先住民、在日の劇作家との共同作業を始める。『居留地姉妹』『ウィンドミル・ベイビー』など。  
武蔵野美術大学非常勤講師。桐朋学園短期大学、日本大学芸術学部の実習公演を演出。楽天団代表。一般社団法人日本演出者協会理事。

メじゃないですか(笑)。それから、演劇ってフィジカルもメンタルも両方いじるから、ものすごく深い芸術活動。でも「社会における演劇的効用」ばかりを求められちゃうと、ちよっと本末転倒なんだよっていう気がする。確かに、演劇を通して自閉症の子が喋るようになったり、不登校の子が学校に行けるようになったりもあるけど、演劇は演劇として伝えながら、結果的にそういう効用が出てくるといふ実証ができたらいのになっていつも思うの。「役に立たなきゃいけない」って言われるとちよっと悔しいじゃん(笑)。  
流山児 ■それはつくづく思う。費用対効果とか言われると俺ムカつくんだよね(笑)。

## ▼精神的な居場所

和田 ■日本の現代劇は心理への拘りに比べて、身体から生まれるという発想にまだ充分にいけない。この世で身体があつて、みんな身体のことでも悩むわけでしょ？ どうしたいのか、どう生きたいのか、どうありたいのかっていうのが、演劇の中で充分できると思うんで、それをもっと考えてやった方がいいと思うんだけど。

宮田 ■身体を使う俳優はともかく、演出家って、だいたい自分の身体を使ったことがなくて演出してる人も多いでしょ。若い演出家たちが早めにそれに気づくといひんどうけど、若い時ってやりたいことの方が先行するから、なかなか難しいんじゃないかな。演出家が、表現者の肉体のクセも含めてその俳優のことを愛してたりしちゃうと、偏った肉体のまんまでずっと表現していくことにあまり抵抗がなかったり、俳優自身もそれをおもしろがって自分の武器にしてしまう。それはその人間の個人種だから素敵なことだと思っけど、どっかでその俳優が壁にぶち当たったら気の毒だという気もするし、演出家自身もそこで表現の限界をも感じてしまうと苦しく

なるよね。

流山児 ■「老いる身体」みたいなものがあるじゃないですか。「パラダイス一座」っていう舞台を作った時に、元理事長の成井市郎さんが90歳の時から95歳までの5年間、5本の芝居に役者として出てくれた。演劇界最長老の演出家を使って芝居を5本作れた5年間で、僕にとつての宝です。世の中と戦うって言っちゃおかしいけど、この国の3分の1は老人なんだから、老人の「最後の反乱」を演劇でやれたらオモシロいと思ってる。

宮田 ■私、ずつと言ってるんですけど、中年は心のヒダも脳みそのヒダも多くなってるから、絶対中高年から芸術をやるべきなの。  
流山児 ■そうだよ、まったくそう！ みんな芝居やればいいんですよ。そうすると健康にもなるしね。

宮田 ■若い時は若い時の良さがあるけど、中年って実はとても感受性豊かだもん。

和田 ■生きてきて戦ってきた歴史を持つてるわけだから。それに、今までできなかったことをやりたいという意思表示がとても明確だよ。

流山児 ■老いても老いたままで終わらずに好きなことやっていいと思うし、自分が生きてた証と、自分たちのエロスっていうのを見せつけてほしいね。エロチックな関係をずつと維持するためには演劇が一番すごいと思うんだよね。

和田 ■どんな役だつてやっていいんだっていうね。何歳の役をやつてもいいんだ、何歳になつてもそれは自然なことなんだってね。今、精神的な……居場所がないっていうのが大問題。地方でも高齢化、疎外化が進んでいるから「もつと話したい、もつといろんなことをやりたい」っていうのがこれからすごい数増えていくんじゃない？  
流山児 ■子供や高校演劇と同時に、高齢者あるいは身体障害者の演劇みたいなのがいっぱいあつて、どこにでも「演出家のやれる仕事」



流山児祥 (りゅうざんじ・しろう)  
流山児★事務所代表・演出家・俳優。主な演出作「オールド・パンチ」：倉林誠一郎賞個人賞「ユーリントン」【ハイライフ】：紀伊國屋演劇賞団体賞「十二夜」：ビクトリア演劇祭ベストアンサンブル賞など受賞作多数。中高年劇団＝楽塾などシア演劇連動のバイオニアである。台湾演劇人とのコラボレーション「マクベス」が6月第24回シビウ国際演劇祭正式招待公演決定。一般社団法人日本演出者協会副理事長。

## 鼎談：協会の使命 和田喜夫 × 宮田慶子 × 流山児祥

はあるんだってことをみんなで考えて、演出者協会から発信し続けないと。  
宮田 ■そのために20代から80代までが一緒に集ってるわけ。  
▼ざつとくばらんな協会だから

和田 ■日本の現代劇はロングランも旅公演も難しく、消費構造になつてきている。それを打開するには、一般的な生活のリズムとどう向き合うか、社会の問題とどうつながるか、上演の時期、野外を含めた上演場所、手法を再考することがひとつの課題かな。見たい人も潜在的にはものすごくたくさんいて、やりたい人もいる。だけど家庭の中から出られないとかいろんな状況がある。それらを演劇団体が協力して公開で話し合うことが重要だと思う。

流山児 ■あとパブリックスペースをどう芸術空間にしていくなつても、政府とか文部科学省に提言していく。

宮田 ■教育、高齢者のこと、高校生、とたくさん課題が出てきましたね。すでに展開している事業と、新たな課題。これからは何かを縮小して何かを膨らませるとか、そういう作業も必要な時期に来たのかもかもしれません。

流山児 ■ただ僕たちはあくまでも個人なので、個人の演出家が国内外を飛んでフットワークよく、そしてネットワークをどう作るかだね。そのつながってるものを私有化しないで共有化することって問われている。宮田さんが言った「最低限のスタンダード」をやることも、とっても大切なことだと思うんですよ。

和田 ■それに関して言うと、共通の、シンブルで分かりやすい「演劇入門講座」みたいなテキストを協会と一緒に作るのも一策だと思う。非常に大変な作業だと思うけど、それを配布し各地で講座を開くことで、一般の人も含めて、共有できるものを確認し合えると思う。

流山児 ■「夢の企画を持って人会しませんか？」って、俺が90年代に考えた演出者協会のコピーなんだけど、ざつとくばらんな協会だから、誰でも夢の企画を持ってくればいいし、いつまでも、誰とでも一緒にやれる組織でありたいですね。ケンカしていいんですよ(笑)。仲良くするのも大切だけど、ムカつくんだつたら言い合えばいい。演劇は何を言ってもいいし、何をやってもいいんだよ、責任を自分が取れば。自分に戻ってくることで。確実に人間は死ぬ存在なんだから、だったら好き放題やれ！ って俺は、思うけど(笑)。

【了】



# 若手演出家 コンクール 2016

## 最優秀賞 ・ 観客賞



演出家：永野拓也 (神奈川県 / nicopro)

### 『ツクリバナシ ミュージカル』

出演：飯野雅彦、飯野めぐみ、高原紳輔、寺元健一郎、水野貴以、宮島朋宏、和田清香

作曲：奥田祐 原作：柴幸男『つくりばなし』

■最優秀賞受賞の気持ちをお聞かせください。  
作っていて、誰かにちゃんと意見をもらって意外と少ないと思うんです。

面白かったよ。とかそういうのは勿論あるんですけど、これがよかったよとか、逆にここをこうした方がもっと面白いよとか言ってもらえる機会がそう多くなくて。このまま続けていいのかって悩んだりもするんですけど、今回、もうちょっとやってみようっていいよって言ってもらえた気がしました。それは凄く、いや、めちゃめちゃありがたかったです。

■若手演出家コンクールに参加してどう感じましたか？

皆、色々な思いがあって演劇をやっていると思うんですけど。演出家って公演を打つ事で、色々な人を巻き込むじゃないですか。作品を作るといふ事、誰かの時間を拘束するといふ事の意味を改めて考えましたし、これから演劇、舞台をやり続けていく事についても、自分を見直すいい機会になりました。

■作品作りで心がけている事がありましたら教えてください。

かなり若くて痛いころなんですけど、なかなかどん底で、全部が嫌になる日があって。でも、ミュージカルを見た次の日の足取りは軽いぞって感じがあったんです。いると思うんですけど、そういう人だから、恩返しというか。今回の作品も僕なりにですけど、「とりあえず明日ちょっとやったるか」って気分になってもらう。そんな事は大事にしたつもりです。

■美術のイメージをお聞かせください。

今作のテーマが「情報の過多」だったんです。情報自体が娯楽という意味も含めて、過剰になっていると思うんですね。テレビ、アプリ、ゲームとか沢山の情報を消費しているだけで一生を終えることが出来ちゃう。それって多分凄く幸せな事ではなくて。今作に出てくる漫画家は、自分の絵じゃないものに取り囲まれているわけで、それが自分にもすごく影響を与えたいとも思っています。「情報過多」で一番先に何を失うのか？ そんなイメージです。



演出家、俳優、nicopro 主宰。  
1985年千葉県生まれ。  
青春時代をミュージカルと共に過ごす。  
2015年に旗揚げし、沖縄と共同制作した作品が全国5都市で公演。  
音楽で浮き上がる感覚や感情を掬い集めて人を描けないかと試みている。

■ミュージカルの構成で気をつけていることは？

作品の中の音楽とはなんなんだ？ という事をとても考えています。ミュージカルが演劇の延長にしたいと思ってるんです。動機や根拠がちゃんとあって、これなら音楽が流れる事に納得できるという風にしていきたい。感情の線って、メロディラインだと思っんです。そして、楽曲には通らなきゃいけない感情の点はあらかじめ打たれている、そこを見事にお芝居で繋いで線に行けるのか？ ……なんてことがすごく難しく。

感情の線がそのままメロディラインになるという事は、これからも目指していきたいです。

■今後の展望を教えてください。

ミュージカルと演劇として位置づけられてるかもしれないなと思っています。でも、今回原作に使わせて頂いたのは「ままごと」の柴さんの本です。普段ストレートプレイしかやらない役者さんにも出演してもらっています。今後機会があれば、ストレートプレイの戯曲や役者さん、今回出会った方々とも一緒に純粋にミュージカルを作ってみたいです。そしていつか海外にも持っていったらなあ、浮かれていますか、うっすら願っています。

優秀賞 大河原進介 (宮城県 / 演劇企画集団 LondonPANDA)

『生きてるくせに』 作・演出：大河原進介

出演：小畑次郎、浦川拓海、中村美貴、東谷英人、木村涼

■応募の動機を教えてください。

今は仙台拠点なんですけど、東京でやってきたことやロンドンで見えたもの、これをやりたいっていうのをどこかにぶつけたくて応募しました。劇団を旗揚げして10年目ですが一度も応募したことがなくて、若手だと言えるのも10年以内かなと思って。

僕は桐朋学園出身なんですけど桐朋卒が3組残った回(2013年度)があったじゃないですか。その時に惜敗したのが(唯一)桐朋じゃない仙台の短距離男道ミサイルの澤野君なんです。なので仙台としてこのコンクールに勝ちたいっていうのもあって。

■イギリスと日本の演劇に対する事情は全く違うと思うんですが、その差についてはどう考えていますか？

教育の中にドラマの授業があったり、各劇場が行っているワークショップが「習い事としての演劇」として成り立っているのはすごくうらやましくもあります。でもそれを誰かのせいにするんじゃないなくて「日本でもやりやすいじゃん」って、自分の地盤である地元の仙台でやってみたいと思ってます。ロンドンから帰ってきて、35歳から演劇続ける場所として地元を選んだわけですが、何か新しいことを始めるのに東京である必要性を感じなかったんですよね。違う角度からアプローチしないと、埋もれちゃうなと思って。

■今後の展望は？

10年以内に、もう一度ロンドンに行きたいですね。その時に応用演劇であつたり地域に根差した演劇のかたちをしっかり学びたいと、仙台に輸入できたらと思います。



1981年生まれ・仙台市出身。2007年に東京・下北沢にて演劇企画集団 LondonPANDA を旗揚げ。毎回《近所に居そうだけど見たことはない人々》をモチーフに作品を紡ぐ。佐藤佐吉賞 2010 年度最優秀演出賞、2012 年度優秀作品賞を受賞。2015年にロンドンへ遊学。帰国後、2016年より活動本拠地を仙台に移転。

優秀賞 中村暢明 (東京都 / JACROW)

『カノチカラ 〜リグラーの変態〜』 脚本・演出：中村暢明

出演：谷仲恵輔、鍋島久美子、霧崎今日子、青木友哉、内田健介、奥野亮子

■応募の動機を教えてください。

ひとつは、たくさんの人に評価されたいことを言って頂き、冷静に自分に足りないところやこれからの課題など、自分達や身内ではわからなかったことに気付けたから。もうひとつは、最終選考に残れたら、色々なお客さんが来てくれるので今後の動員集客の為に知ってもらいたかったから。

■今回の作品は「蚊」がテーマでしたが、どうして「蚊」を選んだのですか？

人が追い込まれる時の小さな力の集合体の象徴として「蚊」をモチーフにしました。蚊に1匹刺されたくらいではないことないけど、でも毎日、累積十萬匹くらいに刺されたら、そりゃ人は死ぬだろってこと。もうひとつは途中出てくるんですけど、蚊の音を耳鳴りとして表現しました。冬に蚊が飛んでいるというところは、見えないものを見ているということなので、精神的に追い詰められた人の象徴として蚊の力と蚊の不快な音を選びました。

■今回のお芝居の一番の見どころ、一番力を入れたところを教えてください。

カノチカラとタイトルにつけたように、とにかくかわじわと真綿で首を絞めるような会話劇にしたいと思っていて、人間のつい思ってたかたけど出てしまふ暴言とかは、あるあるってことで、結果、ボタンの掛け違いで不幸になるという事に一番力を入れました。みんなが善人でもあり悪者でもある。最後に死んだ「さち」っていう主役の子も悪いところがある。それを観ているお客さんも傍観しているところは悪い。みんな悪いところがある。でもその悪いところは、誰にでもよくある悪いところであって、法律を犯すような絶対的な人を書いているつもりはないということです。



JACROW 代表・脚本家・演出家。リアリズムを追求した緊張感のある舞台作りを得意とし、外部演出も数多くこなす。一方でサラリーマンとしての顔も持つ異色の演劇人。2009年サンモールスタジオ年間団体賞。2015年鶴屋南北戯曲賞候補。2017年テアトロ新入戯曲賞。



優秀賞 森田あや (神奈川県 / らまのだ)

『みぞ味の夜空と』 作：南出謙吾 / 演出：森田あや

出演：日下部そら、滝寛式、松本みゆき、藤本紗也香、西井裕美

■応募の動機を教えてください。

らまのだの劇作家が応募マニアなんです。(賞を) 取ることに意義があるんじゃないかって、出す(応募する)ことで審査を通して自分の作品を見てもらうことができるからって勧められました。

■実際に応募してから最終審査までの期間に感じていたことは。

一次審査も通ると思っていなかったのですが、連絡が来た時はびっくりしました。気負わないうっせーって思ったけど、やっぱり勝手にフレッシャーを感じて少し窮屈になってたかも。演出を評価してもらってよかったはその作品に携わった全ての人への評価だから、それも含めてこの場にいられて嬉しいなと思います。私の名前前で評価されるけど私一人の作品じゃないと感じているので、周りのみんなに連れてきてもらった分、作品を通してちゃんとお返ししていきたいです。

■今回の作品で、演出上こだわったところは？

登場人物たちの「可愛いところ」と、物語の中にある「日常に転がって居るちょっと特別な瞬間」を戯曲の手触りを大事に掘り上げたいと思って。たった1時間でもそういう瞬間の連続で緊張感のある物語を紡ぎたいです。

■今後の抱負を教えてください。

私は舞台上は俳優の場所だと思っているので、「私はこの人(俳優)のことが好きなんだ」という部分をうまく(舞台上に)乗せられるようになりたい。そしてお客さんに、俳優を好きになってもうえたら嬉しいです。あとは《劇団》という創作のホームがあることはありがたいことなので、私たちと関わってくれる人たちと、大事に作品を積み重ねていきたいと思っています。



俳優・演出家。らまのだ主宰。2015年らまのだを旗揚げ。以後、すべての劇団作品の演出を手掛ける。戯曲に描かれていない心理、余白にアプローチする。俳優に緊張と不安定を与えることで、奇をてらわず日常に隠された特別な瞬間を繊細に切り取る。





# 若手演出家コンクール 公開審査

若手演出家コンクール2016の最優秀賞を決める公開審査が2017年3月5日(日)17時より、下北沢「劇」小劇場で行われた。

本コンクールは総勢87名の応募者から15名が第一次審査を通過。第二次審査を経て、昨年12月に4名が優秀賞に選出、表彰された。この4名より最優秀賞を選出するための最終審査上演が2017年2月28日(火)3月5日(日)まで下北沢「劇」小劇場で行われ、その最終日の上演後に公開審査をもって各賞が決定する形式である。

審査員は青井陽治、鶴山仁、加藤ちか(舞台美術家)、小林七緒、坂手洋一、篠崎光正、日澤雄介、宮田慶子、流山児祥の9名。あいうえお順。

各審査員が2票ずつの投票権を持つこれまでの審査方法から一新、今年度は審査員が個々に順位をつけ1位に4点、1点ずつ下がって4位に1点が入り合計点を競うというものになった。

## 講評(全審査員の発言より抜粋)

**大河原準介**(宮城県/演劇企画集団LondonPANDA)

**青井**▶演技の質という意味では一番好きです。ナチュラリティ、呼吸も珍しく普通にできている。後半、お父さんの独演会で腰砕けになった。あそこでお父さんの生き方、人格、とてつもないエピソードに感動させて欲しいかった。コンフルの傾向に「自分探しシリーズ」というのが続いて辟易した時期があって、それが数年前にやっとすんだと思ったら、今年は「自分甘やかシリーズ」だと思えました。脚本としては、一番最初に反対するお兄さんが一体どこから賛成になったのか見えない。妹さんの婚約者の通ちでごはんを食へに来る彼も、この一件を通じてどこから家族の一員という意識を明確に持つのかを示せば、併せてもっと面白くなったんじゃないかな。

**流山児**▶小道具が面白いと思った。セツトも工夫している。お父さん面白く思ってたんだけど、もっとむちゃくちゃな男

でもよかった。自由って言ったけど全然自由に思えなかった。お母さんとか不在の人が見えてこない。客席を参列者として使うならもっとうまく使えたんじゃないかと思う。いつもの大河原君と違いすぎるからちょっと遠慮したように見えた。遠慮なんかしなきゃいいのに!

**日澤**▶人物の説明はかなり極端に排除したところから物語はスタートして、どこぞそれを回収していくのががっかりしない。1+1+3という式で、兄の役が教師であるということが3だとしたらその2の部分でセリフにしないで衣装のジャージで表していたりすると思うんだけど、俳優の居方というか身体がもっと明確に出ていけばよかった。もう少し演出でその辺りを踏ん張ってもよかったのではないかな。後半の伸びがなかったのは台本のせいというよりはたぶんその台本に散りばめられている宝の出し方が弱い。笑いを取る方に集中して力んでしまったように見える。

## 「永野拓也」(神奈川県/Hicpro)

**富田**▶ミュージカルの演出ってストリートプレイの何倍も手がかる。そのことに敬意を表する。作曲家との打ち合わせとか、たかさんのMナンバーあるけど曲調全部決めてオーダーしてらっしゃる。俳優さんたちも実力派たちが集まってるクオリティが高い。ツクリパナミュージカルの「プロデュース」としての虚構性をわざと使ったこと、「創作」としてのツクリパナをしっかりと意識した二重構造が面白いんだと思う。

**小林**▶ああ、これをやりたかったんだね、というのがはっきり伝わったので気持ちよく見られました。ミュージカルがすごく好きで本気でやっていたのに、本気でバカにして遊んでる感じもあって、「ミュージカルってこんな感じ」っていう顔とかもわざわざやるんだろ、と短く切ったです。前説やラストも、もっと短く切りたいのに。気楽に見てください、すらなくても気楽に見たいと思う。ラストも、人が降って来てほんのちよつとやって終わってくれたら気持ちよかったです。やり切った遊んでくれちゃった方がよかったです。それと登場する3組はずっと意見が一致してるんだけど探めたりしないの? ってすごく思いました。**青井**▶ここであのレベルのミュージカルを

やったこと自体が快挙。それだけに音楽の構成が良くないことが残念です。全体としての音楽的な流れとビークの作り方。ひとつ音楽が終わって次の音楽が出て来るまで、音楽が鳴ってない時も音楽じゃないと。パララに別れたクリエイターの分身3人。彼らが補充し合って合体する時と漫画の4コマ目が描ける瞬間が一致したらすごく感動できたはず。図式を真実に飛躍させる力はストリートプレイよりミュージカルの方が圧倒的なんですから。編曲と音楽の技術とセンスがこういいう小劇場では難しいから、演出家はもっと勉強して、プランナーと作戦を練らなければいけないと思う。

## 「中村暢明」(東京都/JACROW)

**宮田**▶自然でリアルで無駄なく緊迫感があった引き込まれて見ました。演出的なことではテーブルは浮いてなきやいけないかなとワイヤーがずっと気になってクリアな脚やダメだったのかとか考えながら観ていました。斜めに傾いてみたりしてもよかったのか。座り位置を計算してらしたそれの関係性でもよくわかるんですけど言葉のお母さんと娘のシーンの位置だけどっちが正しかったのかな、逆かなと悩みました。娘の方の表情が見えた方がいいのかもしれない。蚊の音の設定に関しては、耳鳴りのようなもつと何かがぶれていく、壊れていく音でもいいのかなと思えました。

**加藤**▶リアリズムの追求と、その緊張感を伝える舞台装置を、役者と稽古もせず、役者の肉体と対峙もせず、造形のみ、舞台造りを舞台美術家は絶対に行わなければいけません。演出家は深い効果を得るためのデザインプランなら、テーブルの脚を無くし、ワイヤーで蜘蛛の糸のように吊り不安定にしたことで、どれだけ効果を得られたか、芝居を稽古場で確信を得るまで突き詰める事が根本的にかけていた。人の本質に迫るべく、いかに本で、演出家として、等身大以上を求め、芝居を一段高あげたい志の高さを伺えたが、その芝居を引き出す、プロセスは今後の課題である。演出家として、舞台上で起こる事の肉迫や、本質を追求する事を、もう一度客観的に考えていただきたいと思いました。

**鶴山**▶キャラクタもそれぞれよく作ってられている話も展開していく。すいすい

見ることができました。ただ、やや思わせぶりなテーブルと椅子を中心にしているというグルームと会議スペースと、それからちよつと死と隣接しているような手すりとか、実は影響し合ってるというあたりを、もっと積極的ににおやりになったらよかったんじゃないかと思えます。例えば、2場目の転換でどうしてお母さんと娘が交錯しないかな。もうひとつ、別の空間にいても時にフラットと手すりに立ち寄る人がいればどうだろうと、そんなことを思っています。色んなものが局所的になかまわっていません。しかも、僕も他の審査員同様、緊張感を持って観ることができました。

## 「森田あや」(神奈川県/らまの)

**篠崎**▶前の作品も同じような傾向。前回は演出的な構図にこだわっている印象を持ったので、今回も最初から机の上にある毎シヨートキーに照明が当たっていたので、今回も構図にこだわりのかな? と思ったんだけど始まって数分でそうじゃないと確信しました。キャラクタの方に演出家としての興味が向かって一皮むけたように感じました。それからドラマの構成方法なんだけど、デフォルメする部分が強すぎてリアリティに欠ける場所があったり。それもあなたの考えるドラマだと理解しました。また、兄妹の関係は独創的で繊細な表現で楽しく観ました。

**日澤**▶会話のスピードがすごく速い。はじめに会話のスピードを上げるのは刺激的だったんだけど、話が進んでお兄さんが北海道に行くんだとか妹の元彼がミニカーで遊ぶんだとか兄の元カノがタイガーマスクやると色々僕の中では理由がわからなかった。ちよつと突飛な行動をただ突飛な行動として届けてしまっただけなネタになってしまっ。セリフ上の情報の下にある感情や心情がわかるとときにお客さんが何かを思ってくれる。最後のお兄さんが妹さんをお前はえらいなって言っとることとか妹さんのモノローグとか仕掛けがホンととしては複雑で答えが出ない。答えが出ないことを描いていく。アフタートークで言っていたこれには終わりはないんだという定義はすこ

く好きでいいと思うんだけど、カーテンコールをやらずに客席をつけることで継続性を出すというのは無理がある。

**坂手**▶他人のことってさわれないということが全体的に表現されてる。こういう種類の芝居って一歩間違ると作り手が登場人物を見下して登場人物を愚かに描くことになってしまっ。でもそうではなくここに出て来る人達は見ての私達と一緒にいるという立場で登場人物に対して作り手がちゃんと等距離にいる。返しの速さというのは非常に面白くて必要だからそうやっていただけ、それがリアルなんだと実感していることが伝わって来た。この選択は当たっていると思うし書き過ぎないことになってちゃんと俳優がやってくれるってことを信用して作っているしうまくいってると感じた。

## 獲得点数は以下のとおり。

	青井	鶴山	加藤	小林	坂手	篠崎	日澤	宮田	流山児	計
大河原準介	3	4	3	2	1	4	2	1	1	18
永野拓也	4	1	2	4	2	3	4	3	4	21
中村暢明	2	3	1	1	3	2	1	4	2	21
森田あや	1	2	4	3	4	1	1	2	3	21

本家はここで上位2名(今回は2位同得点なので3名)での決選投票が行われる予定であったが、2位2名と1位との逆転の可能性がほぼないので、永野以外の候補者に4点投票した審査員より異議のない旨の発言があったので、全員合意の挙手をもって最優秀賞は永野拓也に決定した。副賞は50万円と次年度下北沢「劇」小劇場に於ける受賞記念公演支援である。観客賞も52票(有効投票48票、無効票4票)のうち18票を獲得した永野拓也の受賞となり、久々のダブル受賞となった。副賞はビール券3万円相当。観客賞の開票結果は、大河原11票、永野18票、中村10票、森田9票。



# 若手演出家コンクール2015 最優秀賞受賞記念公演



受賞者  
西尾佳織さん  
インタビュー

『2020』  
作・演出：西尾佳織  
日程：2017年3月9日～12日  
会場：「劇」小劇場（下北沢）



■最優秀賞受賞前と後で変化はありましたか？

自分の行動や言葉っていうのが、一緒にやっている人達を巻き込んでいけるんだ、と改めて自覚しました。いいことも悪いことも分け切れない距離と関係性で、人とやるってことだな、演劇つくるって、と思います。前はもっと樂觀的に、「話せばわかる」と思ってしまっていた気がする。でも密な関係性だからこそ、言わなければ明日からも一緒にいられた人同士も、今日言ってしまったら壊れる事があるんだなって。なんだらう、言葉の過剰さに参っている感じがあって、切り詰めて削ぎ落としていきたいです、言葉を。

■今回の作品について

今の自分が、どうしてこうなったんだらうっていうのを、子供の頃を振り返ってもう一回辿ってみる話。辿る中で、昔から全然変わってないなって所と、外側からの力で作られるからどんどん変わってるとなってる所と両方わかりました。作家本人の話を3人の俳優に演じてもらいます。俳優の人はいつでも本人ではなくて役を演じていて、何かになるとか、ふりをする事が欲求としてあると思うんですけど、それが興味深いし、何なんだらうって思うんですよ。人間はだれでも演技をするし、フリもする。「本当」のことが良いとされているけど、ホントは分け切れないし、それが面白いですよ。

■今後の創作活動について

一緒に作れる人達を増やそうと考えています。演劇の人っていう限定ではなく、広く「創作に携わる人」って言うほうが、出会いたい人に出会えるんじゃないかと思って。それで、ワークショップをしていこうっていうのがひとつ。  
もうひとつは、ちゃんと戯曲を書くっていうことに、チャレンジしてみようと思ってます。今までは稽古開始の時、台本は全然なくてやりながら作る。アテ書きだし、採取して書くみたいな感じですけど、その感じを変えようかなと。俳優には、作家の書いた言葉と取っ組み合ってもらう。これからは、プロセスを分けてやってみたいです。

## 在外研修報告 「ロンドン」

2015年11月～2016年9月

鈴木アツト



私は、2015年11月から2016年9月までロンドンに留学した。イギリスの2016年と言えば、Brexitだ。6月に国民投票があり、2015年11月の時点で、EU離脱が残るかその是非についてメディアが毎日取り上げていた。そういう雰囲気の中での留学体験だった。

ロンドンでの生活はまず部屋探しから始まった。私は最初、「イギリス人とルームシェアすることにこだわった。英語力を伸ばしたかったからだ。もちろん、その時のイギリス人のイメージは白人だった。しかし、国際都市ロンドンにはあらゆる人種が集まっている。地下鉄に乗っても英語以外の言語がガンガン聞こえてくる。やがて、イギリス人＝白人なんて思っていた自分が恥ずかしいとさえ思うようになる。そんな中、私のルームメイト、若い白人イギリス人は「俺

は右翼だよ。移民は問題を起こしすぎるから、EU離脱に賛成だ。」なんてことを笑顔で言う。右傾化するイギリスを生活の中で体感することになった。

12月、私はKiln Theatreと出会う。多数派は白人と黒人のロンドン演劇界で、東アジア



系の演劇人の活躍の場を増やす活動をしている劇団だ。彼らはTypoonという東アジア系劇作家限定の戯曲コンペもやっていて、40以上の応募作から6作が選ばれ、リーディング上演される。私も自作を応募し選ばれた。出演者の中国系イギリス人の俳優とも仲良くなり、自分たちをBBCだと言っていることを知る。英国放送協会ではなくBritish Born Chinese。バナナだとも言っていた。外見は黄色でも中身は白人。

時間は進んで、国民投票の翌日。俳優として参加していたフォーラム・シアターの発表公演がその日にあった。芝居の主題は、搾取されるウェイター（外国人労働者が就く場合が多い）。EU離脱がその日の朝決まり、客席を巻き込んだ熱い発言が飛び交ったが、私は、どこか熱くなれないままだった。どこの国でも演劇に興味がある人はリアルな人が多い。でも、私のルームメイトのような普通の人が右翼的だったりするのも、今のイギリスのひとつの真実で、そういう普通の人に対して、自分はどういう演劇をぶつけることができるのか。苦味が残る思い出だ。

# 演劇大学 in おおいた

2016年6月9日〜12日

会場：ホテル大分、コパルホール  
講師：土田英生、土橋淳志、広田淳一、和田喜夫、清水典子、高橋隆寛／オープニング講座進行：山田恵理香／企画制作：一般社団法人日本演出者協会  
企画運営：演劇大学inおおいた実行委員会、一般社団法人日本演出者協会九州ブロック／主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会、共催：大分市  
後援：大分県、大分県教育委員会、大分市教育委員会、大分県芸術文化振興会議、NHK大分放送局、OBS大分放送、TOSテレビ大分、  
OAB大分朝日放送、OCV大分ケーブルテレビコム、エフエム大分、おおいたインフォメーションハウス、おおいた演劇の会  
文化庁委託事業 平成28年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業

今回、初めての大分開催ということで、何をどうするか全く手探りの状態で実行委員会  
が持たれ、まず「演劇大学って何？」から学  
び始めました。私自身も協会員でありながら、  
地理的な遠さもあり、日本演出者協会主催の  
色々なイベントに参加でき  
なくて、演劇大学について  
もほとんど白紙の状態でした。それで今回、大分で演  
劇大学を催すという実行委  
員会立ち上げに、喜び勇ん  
で参加した次第です。実行  
委員会には大分で大分に劇  
団を主宰し活動している人  
や演劇好きの仲間が集い、  
演劇大学を通じて大分に新  
しい演劇旋風を起こそうと  
いう精鋭が揃いました。そ  
して、講師には、現在の演  
劇界を牽引している中堅若  
手演出家の土田英生、土橋



淳志、広田淳一の3氏に来ていただき、大学  
校長を和田喜夫協会理事長にお願いまし  
ました。テーマは「This is 演劇」演出「ちや、  
どげなんな？ 習つちみらんかえ〜」で基礎  
から演出の方法を学ぼうと3名の講師には  
シエークスピアの「真夏の夜の夢」の一部  
を自分流に演出して参加者にやってみよう

という実技と、和田校長には演出の基本を座学  
として講義していただく形を取りました。そ  
して、いずれの講座も素晴らしい内容で参加  
者は大満足の充実した3日間でした。私自身  
も当日は一般受講者に交じって広田氏のワー  
クショップに参加させても  
らったり、それぞれの講座  
を拝見し大変勉強になり刺  
激にもなりました。演劇に  
接する機会の乏しい大分と  
いう地方でこれだけの最先  
端の劇創りに間近に接し、  
私自身も演劇にとっぴりと  
浸かることができた演劇三  
味の幸福な3日間でした。  
今回が「温泉県おおいた」  
ならぬ「演劇県おおいた」  
に繋がる分水嶺になったの  
ではないかと思えます。  
そして、最後になりました  
たが、日本演出者協会の皆  
様、そして、特に山田恵理香氏はじめ、福岡  
の協会の方々との甚大なるご協力に感謝申し  
上げ報告の締めとさせていただきます。

# 演劇大学 in 函館

2016年8月11日〜13日

会場：函館市民会館  
講師：小林七緒、シライケイタ、平塚直隆、和田喜夫、大杉良、田畑善孝／企画制作：一般社団法人日本演出者協会／企画運営：箱館演劇ライン実行委員会、  
一般社団法人日本演出者協会、主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会、後援：函館市、函館市教育委員会、公益財団法人函館市文化・スポーツ振興財団、  
函館市文化団体協議会、北海道高等学校文化連盟道南支部演劇専門部、函館市青年センター、北海道新聞函館支社、函館新聞社、NHK函館放送局、HBC函  
館放送局、NCTV函館ニュメテア函館センター、函館山ローワーウェイ株式会社、文化庁委託事業 平成28年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業

函館で初開催となった演劇大学は、未経験  
者でも参加しやすいように2つにコース分けし  
た演劇体験講座、3コースのダンス講座に加  
えて、戯曲講座、発声講座、初心者の演劇入  
門、夏休み子ども向け演劇ワークショップと  
全9コースで構成した。  
いずれのコースも歴戦の  
猛者を講師にお迎えしたの  
だが、「知らない」という  
ことが函館にとっては弱み  
であり、最大の強み。シャ  
イな市民性もあって参加  
者のほとんどが最初はな  
かなか入り込めずいたもの  
の、ひとたび打ち解けてし  
まうと、講師も他の参加者  
も一緒に楽しくみなが  
ら「演劇」を学ぶことがで  
きたようだ。



2日目、明日でいよいよ  
最終日という段になって、  
演劇体験講座の講師である  
シライさんの発案で、「戯曲講座で参加者が  
書き上げた作品を、演劇体験講座の受講生で  
上演してみよう」ということになった。それ  
に触発されたのが、ダンス講師の田畑さんも  
「ダンスも発表したい！」ということになり、  
開催1年目にして、豪華3本立ての成果発表

となった。  
キレイレのバレエダンサーとオジサン俳優  
が一緒になってのダンス発表から、会場を変  
えて、女子高生から定年退職した一般男性ま  
で入り乱れてのロミオとジュリエット。南  
米エクアドルから函館へ移  
住した女優さんの飛び入り  
参加により、日本語ロミオ  
とスペイン語ジュリエット  
という印象深い組み合わせ  
もあった。最後には、前日  
に書き上がった戯曲講座の  
選抜作品のセリフを一晚で  
覚えての上演、さらには戯  
曲講座受講生の他の作品の  
リーディングまで。はから  
ずも、戯曲を書きたくて参  
加した受講生は思ってもみ  
なかつた役者デビューも果  
たしてしまった。  
あまり主体性が見えず、  
受け身体質の人が多い函館  
演劇界も、未経験者の貪欲さや感性和混ざり  
合いながら3日間を過ごしたことで、終わっ  
てみれば、「来年はこうしたい、こうやって  
ほしい！」という声が多く聞かれた。そういっ  
た声を反映して、より密度の濃い2年目につ  
なげていきたい。



# 演劇大学 in 内子

2016年9月2日～4日、10日～11日  
会場：内子座、内子自治センター、六日市自治会館  
講師：吉村ゆう、大沢佐智子、西川成美、渡辺美佐子、桂歌若、清水きよし、西沢繁治、平戸麻衣、徳永高志  
制作：一般社団法人日本演出者協会／運営：演劇大学in内子実行委員会  
主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会、共催：内子町、内子町教育委員会  
文化庁委託事業 平成28年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業

「内子座で遊ぼう」「舞台は来るものを拒まない」「小さなまちでおくる劇団」ということをサブテーマに3年間、100周年を迎える内子座で演劇大学を開催してきました。

3年目の集大成を迎える今年は、平成28年9月2日～4日、10日～11日の5日間の日程で開催いたしました。実技講座は、一般・学生を対象とした西沢栄治先生による「演劇体験」、中学生以下を対象とした平戸麻衣先生



演出家・俳優養成セミナー2016  
報告Ⅱ林慎一郎

による「子ども演劇体験」、一般・学生を対象とした吉村ゆう先生による「声優体験」、清水きよし先生による「パントマイム講座」、大沢佐智子先生・西川成美先生による「舞台美術・衣装」、桂歌若先生による「落語講座」、渡辺美佐子先生による「朗読ワークショップ」と盛りだくさんな内容で実施することができました。

昨年引き続きの先生、初めての先生、また、内子座での独り芝居以来久しぶりにお越し頂いた渡辺美佐子さん、皆様、それぞれに受講生に分かり易く、楽しく、時には厳しくご指導いただきました。

「劇場と演劇の文化史」の座学は3年間関わっていただいている徳永高志先生に内子座を中心に、日本のそして世界の劇場と演劇についてお話いただきました。

最後には、3年にわたる演劇大学の成果と感激を語るとともに地域演劇を未来に繋げるため、「小さなまちでおくる劇団」をテーマにフォーラムを開催いたしました。

今年で最後になりましたが、101年目から新たな目標として、内子座を中心にアートインレジデンス、また「内子演劇祭」の実現に向けて取り組んでいきたいと思っています。

# 演劇大学 in さかいで

2016年10月8日～10日  
会場：市民ふれあい会館、香風園  
講師：平塚直隆、和田喜夫、明船由佳、土田英生、田畑真希、小椋直人、鹿目由紀／企画制作：一般社団法人日本演出者協会／企画運営：演劇大学inさかい実行委員会  
主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会、共催：坂出市、坂出市教育委員会、後援：朝日新聞高松支局、産経新聞高松支局、山陽新聞社、四国新聞社、毎日新聞高松支局、読売新聞高松支局、OHK岡山放送、KBN香川テレビ放送、FM香川、FM81.5、香川こまち、高松リビック新聞社、ナイスタウンSBS瀬戸内海放送、OVO中瀬テレビ、TSCテレビせうち、RNC西日本放送、FM香川、FM81.5、香川こまち、高松リビック新聞社、ナイスタウン出版、エフエム・サン株式会社、香川県教育委員会、文化庁委託事業、平成28年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業

香川県で2回目の開催となった演劇大学inさかいで。開催地である坂出市は近年芸術関係のイベントを積極的に開催しようと取り組んでいます。

去年の10月に開催された演劇大学inさかいでは、「演劇はおもしろい2」をテーマに、3日間で7名の講師をお招きして、8つの講座と発表会、シンポジウムを行いました。

延べ約500名の方にご参加いただき、香川県内だけではなく、県外からも多くの方にご参加いただきました。近年、香川県における演劇の企画も、年々増加傾向にあります。去年は10年ぶりに県主催の演劇祭も開催され、県内の10団体の作品が上演されました。

さて、講座の内容に関してですが、こどもの演劇体験では、個人差も出てきている為、もっと難しい事にも挑戦したいという意見がありました。これに関しては、今後講師の方と相談しながら考えていきます。初めて行った狂言講座は、ユニークでわかりやすく受講生にも好評でした。戯曲講座は、坂出駅周辺を歩いて取材し「坂出市が



さめきソルトシティーに変わってしまう前日」というテーマで、受講生が同じ時間軸、坂出駅周辺という場所設定で短編戯曲を書き上げました。演出コースは、短編作品を2人の演出家が、前半後半に担当分けして、それぞれキャストイングして行いました。俳優向けのワークショップ、発表会・シンポジウムは、古い小学校の体育館のような場所で開催されました。

これらの講座を通じて、坂出市における演劇の認知度が昨年よりも上がっているように思えます。行政の方々の理解も昨年以上に増し、実行委員との協力体制による更なる発展が期待できます。

この経験を踏まえて、今年の2月には、坂出市の商店を題材にした短編6作品の公演や、3月にはこども向けのワークショップの開催も企画しています。今後も、坂出市で多くの演劇企画が実施されるよう尽力していきます。

演出家・俳優養成セミナー2016  
報告Ⅱ岡田敬弘

# 演劇大学 in 大阪

【前期】2016年10月13日、11月24日、12月15日  
【後期】2017年1月7日、1月19日、2月19日  
会場：ドーンセンター  
講師：佐藤千晴、森達也、高取英、吉田美彦、西谷文和、永井愛  
企画制作：一般社団法人日本演出者協会 関西ブロック  
主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会  
文化庁委託事業「平成28年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」



「表現の自由と私たちの演劇」というタイトルで2016年度の「演劇大学 in 大阪」を、昨年と同様に6人の講師を迎えて行なった。ただ、今回の特徴は、演劇人のみを迎えるのではなく、表現者の立場からものが言える人、またそれは、私たちが演劇を演劇の中で考えるのではなく、演劇を違う角度や見直しを含めた企画として、講師を選んだのである。6人の方が、それぞれの立場からそれぞれの問題を提起され、我々もまた考えな

ればならない立場に追いこまれたことが印象的であった。

特に、森達也氏は自らが撮影してきた外国の収容所における囚人たちの環境、例えば、恵まれた施設（囚人の部屋にテレビやパソコンがある）、外出自由ともとれる囚人たちの行動。外出するが必ず刑務所へ戻ってくるという情況。この街には、犯罪のほとんどが消えていつている。そんな街の政策が、紹介された。日本のように至る所に監視カメラがあるという環境ではない。管理ではなく解放だ。フリージャーナリストの西谷文和氏は、中東の危い地域に出かけ、取材を続けている。以前は吹田の勤め人だった西谷氏がアフガンやイラクに命がけで出かけている。至る所の戦争は、金を儲けたい人々の仕業なのだ。

劇作家の永井愛氏の『ザ・空気』にまつわる話も、聴き手の石原燃氏の鋭い聞き出しでさらに豊かな内容になった。

こんな形で刺激を受けることができる演劇大学もよいものだと思う。講演者3人も、それぞれ魅力ある内容を与えてくれた。アーツカウンシル責任者の佐藤千晴氏の補助金への考え、作家で演出家である高取英氏の舞台の話、吉田美彦氏の高校演劇の話と、いろいろな角度からのアプローチが聴けて、これまた、大いなる刺激になった。

# 演劇大学 in やまがた

2016年11月18日～20日  
会場：山形市民会館  
講師：小林七緒、平塚直隆、横山拓也、後藤ひろひと、流山児祥、清水きよし、宮田慶子、鹿目由紀  
制作：一般社団法人日本演出者協会／企画運営：演劇大学 in やまがた実行委員会  
主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会、共催：山形市民会館管理運営共同事業体／後援：山形市、山形市芸術文化協会  
文化庁委託事業「平成28年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

「演劇大学 in やまがた」は、山形市民会館で「あ、演劇って楽しいんだ〜」とつぶやいてもしゃい3日間〜」をテーマに11月18日〜20日に開催されました。延べ約260名に受講して頂きました。

演劇実践講座では、岸田國士の『可児君の面会日』を2グループに分かれ、3日間それぞれ発表をしました。受講生の素材を引き出す演出の小林七緒先生チームに対し、ソリッドな演出で不条理感を作り出す平塚直隆先生チームは好対照で、全く違う両作品に発表会では驚きの声が上がっていました。

戯曲づくり体験講座では、3日間で受講生がそれぞれに短編戯曲を書き上げ、発表会ではリーディングと濃密なディスカッションの様子が横山拓也先生から紹介されました。

演劇体験講座はシアターゲームとインプロのメソッドを中心に行われました。後藤ひろひと先生の手腕で大人の大人達が子供のようにゲームで盛り上がる姿は、パフォーマンスの原点を見る思いでした。

朗読講座は、アングラ・小劇場の戯曲・劇中歌を用



いて進められました。流山児祥先生より当時のエピソードも披露され、受講生は興味深く「時代」を感じていました。

パントマイム基礎講座では、10代〜80代まで幅広い年代からの受講生が集まった人気講座で、清水きよし先生が丁寧に教える身体の使い方に夢中になって取り組んでいました。

演劇教養講座は、「演出」の歴史から始まり、演出の仕事の進め方や考え方を、宮田慶子先生に濃密にレクチャーしていただきました。

こどものえんげき体験講座は、鹿目由紀先生曰く「図に乗らせる」ことで子供たちの豊かな発想を引き出し出したのが印象的でした。

発表会後の感想シェアリング会では、受講者・講師が車座になり、講座の感想や来年度の課題について語り合いました。この事業の成果や盛り上がりをもっと一般へもしっかりと周知することが大きな課題としてあげられました。



# 演劇大学 in きたかみ

2016年12月9日～11日  
会場：北上市文化交流センターさくらホール  
講師：佐野バニ子、平塚直隆、和田喜夫、田畑真希、加藤ちか、宮田響子、吉村ゆう  
企画制作：一般社団法人日本演出者協会、運営：一般社団法人北上市文化創造、演劇大学 in きたかみ実行委員会（新田満、菅原星子）  
主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会、共催：一般社団法人北上市文化創造、後援：北上市民劇場を盛り上げる会、つべし、岩手県高校演劇協議会  
文化庁委託事業、平成28年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業

演劇の楽しさを学び、体験者を増やして演劇文化を北上市に定着させたい想いで開催してから、3か年計画の最終年度を迎えた。初年度は58人、昨年度は107人、そして今年度は92人と少し減少した。これは地元の高校演劇部が東北大会に出場したことによる減少で昨年度とは変わりない。

むしろ高校生がこれまで2年間演劇大学で学んだ体験が活かされた結果と受け止め、実行委員一同素直に喜んでた。

この地域における人材育成の課題は、書き手不足と演出家の資質であろう。実際、今年度で40回を数える北上市民劇場の作・演出は市外に住んでいる人に依頼している。地元の歴史や文化題材にしている市民劇場は、地域を理解している作家が求められるため書き手不足の問題は深刻だ。しかし今回の「短編戯曲を書こう」講座（講師：平塚直隆）には、初心者からベテランまで世代を超えた男女12人が参加した。過去2年に比べて増加率は驚くものがあった。徹夜で書き上げた作品は、その後参加者による投票で、上位3人の作品が発表会の場で披露さ



れた。しかも参加者全員が発表作品のキャストとして出演するなど、俳優体験を兼ねた発表会になった。うれしいことにこれらの作品は、参加者からの声かけにより今年の正月に再演された。それだけ魅力的な作品であった証だろう。

北上市の文化拠点となる「さくらホール」は、大、中、小ホールに加えてアトリウムと呼ばれる大小さまざまな練習室やアトリウム、会議室など21室を備え充実している。また施設の利用率は極めて高く、自主事業においても他施設と比べてクオリティの高い事業を展開している。しかし演劇に関してはこれまでこのところ積極姿勢は見られなかった。お客がこないことを心配し、有名タレントが出演する自主公演に終始していた。これでは目の肥えた観客は育たない。しかしさくらホールでは、この演劇大学を出発点として29年度事業から「地域の演劇活動推進事業」を立ち上げた。期待は大きい。

演出家・俳優養成セミナー2016  
報告 II 新田満

# 演劇大学 in くだまつ

2017年1月7日～9日  
会場：スタージュアたまつ（下松市文化会館）  
講師：松本祐子、小林七緒、佐々波雅子、岩崎正裕、横山拓也、大杉良、徳山ひかり、桂歌若、和田喜夫  
企画制作：一般社団法人日本演出者協会、運営：演劇大学 in くだまつ実行委員会、主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会、共催：公益財団法人下松市文化創造、後援：山口県教育委員会、下松市教育委員会、周南市教育委員会、光市教育委員会、徳山大学、山口県高等学校文化連盟、山口県高等学校演劇協議会、下松市子ども会育成連絡協議会、Kヒジョン株式会社、株式会社新周南新聞社  
文化庁委託事業、平成28年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業

3年目の演劇大学 in くだまつは、ここで学んだ人たちが今後も地元で演劇イベントを継続していくことを目指したものでした。

そのためにも表現を多角的に考えたいと、舞台美術家の佐々波雅子先生をお招きし、岩崎正裕先生の演出概論とコラボして「かもめ」を題材に、戯曲から何を拾い出し、どうイメージを広げ、舞台を立ち上げるかを学びました。受講生が自らプレゼンした舞台模型はどれも独創的で魅力的に仕上がっていました。

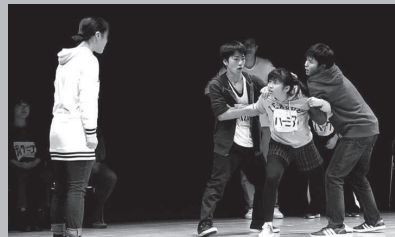
岩崎先生には、昨年に引き続き関係づくりに活かせる演劇ゲームを、今年度は小学生向けにもやっていたいただきました。また「夕鶴」や「注文の多い料理店」等を例に劇作のあり方も教えていただきました。

大杉良先生の滑舌矯正講座は3年連続大人気でした。今年度は、地元出身の徳山ひかり先生に自分の体を意識した発声を教えていただきましたが、徳山先生には、早速この夏にも講座を開く！と宣言していただきました。

横山拓也先生には前回と同様、受講者の劇作を丁寧に指導していただきましたが、良い作品が出来たのに発表の場がないのは残念との声に 대응して、今回は発表会で披露しました。

毎年度取り組んだ発表を目指す「本気」講座は

演出家・俳優養成セミナー2016  
報告 II 石田千晶



集大成にふさわしい見応えのある作品を創り上げました。松本祐子先生の演技・演出講座は「夏の夜の夢」、小林七緒先生の身体表現・演出講座は「走れメロス」、大杉先生のリーディング初心者講座は「ロージン」、経験者講座は「送り提灯」。いずれも心をふるわせる上演で、どよめきや大喝采が続きました。桂歌若先生の落語講座は、2人組の落語や「笑点」ならぬ「松点」で会場を沸かせました。

和田喜夫理事長の演劇相談室や、講師全員にご参加いただいた座談会は、シンポジウムでは距離があつて核心に迫る議論が難しいとの反省から、膝をつき合わせて語り合う形に変えたところ好評でした。

閉講式での先生方のお話も「これから」を想わせるもので、受講生たちは、3日間で、あるいは3年間で得た自信と感動を胸に次の一歩に挑戦したいと誓いました。

何よりの成果は、共催いただいた下松市文化振興財団の皆さんに「演劇の奥深さ、表現の幅広さに感動した。これからも演劇を応援したい」とおっしゃっていただいたことです。

素人ばかりで引き受けてしまった演劇大学ですが、強い絆と大きな自信と夢をいただきました。下松で開催させていただいたこと、心から感謝しております。

## メキシコ特集 メキシコ演劇をめぐる4日間。

2016年7月20日～24日（東京）  
会場：芸術花伝舎 セルバンテス文化センター  
講師：シンポジウムパネラー：フランシスコ・カストロ (Francisco Castro)、アントニオ・カストロ (Antonio Castro)、シンポジウムゲストパネラー：市村作知雄、長島唯レクチャーゲスト：寺尾隆吉、吉川恵孝 / リーディング演出：山下由  
通訳：寺尾隆吉、浜田和範、ルシア・オルネラ、マリア・チェン、担当：川口典成、佐々木浩一 / 制作：一般社団法人日本演出者協会  
主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会、協力：セルバンテス文化センター、東京文化庁委託事業、平成28年度年代の文化を創造する新進芸術家育成事業

2015年度に引き続きこのメキシコ特集は、2016年7月に芸術花伝舎とセルバンテス文化センターにて開催された。招聘講師は、メキシコを代表する作家フランシスコ・カストロと、演出家アントニオ・カストロ氏である。初日は、メキシコ演劇の歴史と現在について、ドラマツルギーの側面と演出的側面からレクチャーが行われた。作家と演出家をそれぞれ招聘したことで、見えて来る演劇の風景がより豊かに、より複雑になったと言えるだろう。昨年のダビッド・オルギン氏のレクチャーと重ね合わせることで、日本で触れる機会の少ないメキシコ演劇についての概説的理解ができるようにも心掛けた。また今回は、ビジョー



口氏の戯曲『雨についての講演』を寺尾隆吉氏（ラテンアメリカ文学研究）が翻訳し、リーディングという形で紹介した。「雨と詩」というタイトルで講演することになっていた文学マニアが、登壇した途端に原稿を忘れてきたことに気づき、一瞬ハニックに陥るものの、何とか気を落ち着けて即興で話を始める

が……という一人舞台である。文学的色気とギミックの効いた巧みな戯曲で、観客の数も多く、賑わいのある会となった。演出は山下由氏、出演は丸尾聡氏である。最終日には、「誰が観客（読者）か？」というシンポジウムを行った。あえて「メキシコ」という地域に限定したテーマにはしなかった。地域的な問題ではなく、同時代的問題についてディスカッションしたかったからだ。シンポジウムゲストには、市村作知雄氏（フエスティバル／トーキョーディレクター）、長島唯氏（ド라마トゥルク、翻訳）、アートフェスティバルやアウトリーチの分野では、「関係性の美学」（ニコラ・ブリーオー）に基づいた企画が乱立し、「観

客」から「参加者」へという流れが主流となっている。だが、果たしてそれはよい兆候なのか。グローバルズムとフェスティバル主義との関係（癒着）についても話し合われた。演劇における「言語」や「テキスト」、そして「観客」について議論し思考する4日間となった。

## アフガニスタン特集 演劇の力と可能性を探る「フォーラムシアター」

2016年7月20日～24日（東京）、7月27日～31日（金沢）  
会場：東京芸術劇場（東京）、スタジオ尾（金沢）  
講師：ヤルマー・ホルヘ・ジョー・フリール（Yaromar Jorge Ufere Urbina） / リーディング演出：公益義徳（東京）、岡井直道（金沢）  
シナリオ：同協会進行：林英樹 / 通訳：大谷治郎、角田英知代、担当：林英樹、岡井直道、佐々木浩一、公益義徳、加藤明美 / 制作：一般社団法人日本演出者協会、主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会、後援：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）  
協力：公益社団法人国際演劇協会日本センター、劇団アゲル、東京演劇アンサンブル、有限会社高岡事務所、花輪雄  
文化庁委託事業、平成28年度年代の文化を創造する新進芸術家育成事業

今回のセミナーはアフガニスタンに拠点を置いてフォーラムシアターの手法を使った活動を展開するヤルマー・ホルヘ・ジョー・フリール氏（ポリア／ドイツ国籍）を招き、フォーラムシアターを巡って東京と金沢でセミナーを開催した。最終日にはアフガニスタンの無名の人々の草の根の声を「プレイバックシアター」の手法で集め構成した『修復不能』のリーディングと講師のレクチャーも実施。



講師は2007年初頭よりアフガニスタン在住、在勤、2009年にアフガニスタン人権民主主義連盟（AHRDO）をアフガニスタンの人々と創設。AHRDOは独立NGO／NPOで、アフガン社会における少数派のセクターと強く結び付きアートや演劇を主とした活動を通して草の根から社会の抜本的改革の場を創造し、対話および平和構築、正義、市民の社会参加、民主化や非暴力の文化、そして人権尊重の促進に貢献している団体である。

「フォーラムシアターは問題を可視化する。現代劇は解決を伝える。何をすべきか、など。が、フォーラムシアターは解決しない事を見せる。世の中で何が問題かを見せる。」と講師は言う。「今から、日本の問題の深いところに入りたい。心から話して欲しい。」「日本の嫌なことを言葉で話す。」「いま、日本でおきていること、危機感を感じること、様々なアクティビティの中から短いパフォーマンズを作り、最終日に観客参加型のフォーラムシアター（討論劇）を試みた。題材は東京、金沢それぞれ2作品、東京は「本当のことを教えて（フクシマ関連）」、「オーバーワーク」、金沢は「安全（フクシマ関連）」、「自分らしくなれない」。一度、観客を前に上演しその後、今度は観客が劇の途中で手を挙げ主人公と交代する形で発表が行われ、積極的な観客の参加によって盛り上がった。また予想以上の参加があった。



## 韓国特集 韓国演劇の今を訊く！

2016年8月18日、21日、24日(東京)、8月25日、28日(松山)  
会場：芸能花伝舎、日本大学芸術学部(東京)、シアターね(松山)  
講師：パク・クニョン(朴根亨)／翻訳：青春礼讃、石川智恵／通訳：洪明花、和田喜夫  
制作：一般社団法人日本演出者協会  
主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会、共催：NPO法人シアターネットワークえひめ、国際演劇交流セミナー2016(松山実行委員会)  
文化庁委託事業、平成28年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業

パク・クニョンのワークショップ 幕開きの言葉はシヨッキングとも言えるものだった。「すみません。4日、5日程度では、皆さんには何も教えられません。」しかし、彼の言葉を額面通りに受け取ってはい

けない。レクチャーでは、演劇論ではなく、彼の半生記が語られる……。彼にとつて演劇とは、劇場で観客を相手に行われるパフォーマンス

のことではなく、稽古場のことであり、若い劇団員がそこに泊り込んで飲みながら議論することであり、人間と人間が心を裸にして交流を深めるいとなみすべてを指すことなのであった。公演として現れるものは、そのいとなみの結果のひとつに過ぎない。

大学の演劇科に行かずに俳優となり、演出をする人がいないから演出をやるようになり、本を書いてくれる人がいないから仕方なく自分で本を書くようになった。彼の経歴を文章にして読めば、なんと消極的、受動的な経歴であることが一そうやって生きて来た彼はこう言う。「演劇には、こうしなければならぬという様式や方法は、いっさい無い



のではないかと。それだけ自信としてやってきた。」それが実際の舞台となるとき、彼の舞台は「何をやってもいい、何でもアリ」の公演とはならない。逆に、「ほんとうに必要なものだけがあり、あとは何も無い」公演となる。そこには濃厚な人間関係のみがある。大多数の演劇はやらなくてもいいことをやりすぎる。

「4日、5日程度では何も教えられない。」はある意味、真実だ。ワークショップでのテキストとなった「青春礼讃」のソウルでの公演を、ワークショップのあとで観劇した筆者は強く思った。「私は何もわかっていなかった……」。しかし、公演を見ながらワークシヨップとレクチャーの記録を見返すと、こうも思ってしまった。「パク・クニョンは、ほんとうに必要なこと、重要なことばかりをずっと言っている。なんと濃厚で、意義深い時間であったことか！」

気づかないうちに彼のメッセージは参加者に注入されているのである。自分がそれを学んだことに気づくか気づかないかは、参加者自身にゆだねられてはいるけれど。

国際演劇交流セミナー2016  
報告 広田豹

## マカオ特集 演出家のためのワークショップ：ミニマカオ 事件から想像し、創造する六日間。

2016年9月20日、25日(札幌)、9月27日、10月2日(東京)  
会場：フレッドペリススタジオ、札幌、芸能花伝舎(東京)  
講師：フレイブ・チャン(陳飛歴)／通訳：森達也(斎藤)、王梓安、山本範子(札幌)、鄭真、杜玉(東京)  
担者：佐川大輔、佐々木浩日、川口典成、前田透、制作：一般社団法人日本演出者協会  
主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会、文化庁委託事業、平成28年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業

本企画は、参加者が相互に語り合うブレインストーミング型の「演出家向けワークショップ」である。「実際の事件を元に演劇化する」というルールのもと、全6日間で各自の上演プランを語り、最終日には成果発表を行った。

初日は講師の陳飛歴氏から、マカオ演劇事情や彼の活動を紹介してもらった後、全員が上演プランをプレゼン。



「何故、作品化しなければいけないか？」といった創作の根源にも触れていく。その過程は自らの演劇アイデンティティを見直すことにも繋がったように思う。

5日目には、成果発表する上演プランを2〜3つに選抜する。この過程も「魅力的な上演とは何か？」を考えるうえで有意義であった。

陳氏は30代とまだ若く、フランクな性格だったので、参加者も発言しやすいオープンな雰囲気になった。また、彼は実在の事件を演劇化した経験が豊富だったので、この企画の講師としては適役であったように思う。

上演プランのプレゼンは、「演劇化する実際の事件」の資料を各自が持ってきて、それをシェアした後、「どのような上演スタイルで行うのか?」「また具体的にどのようなテキストを使いたいのか?」といった内容で、非常に個性的でバラエティに富んだものになった。

2〜4日目、様々な角度からブレインストーミング形式で、推敲作業を行う。各自が率直に意見を交わすことで、「自らのプランに足りない部分は何か?」を客観化した上、

最終日はチーム毎の成果発表を。作品のエッセンスについて、実際にプレゼンテーションを行うのだが、これがどれも秀逸。どの発表も切実でありながら、普遍的な何かを獲得しているようで、とにかく魅力的だった。様々な角度から検証するブレインストーミングの長所が出たのではないかと。

今回のワークショップは「課題戯曲無し」という方針だったため、「参加者の共有が難しいのでは?」と危惧した。しかし「リアルな事件」を元に作り上げた効果は大きく、存外には共有はスムーズであった上、各自の創作姿勢も真摯なものになり、成果は非常に大きかったと思う。この「実際の事件の演劇化」ブレインストーミングは、今後の継続を期待する。

国際演劇交流セミナー2016  
報告 佐川大輔

## ウエールズ特集

ワークシヨップ「SONS AND DAUGHTERS」  
あなたはいつも誰かとつながっている 自己探求のための5日間

2016年10月12日〜16日(東京)  
会場：芸能花伝舎  
講師：ジル・グリーンハーフ (Jill Greenhalf) / レクチャーゲスト：吉村桂充 / レクチャー司会：篠本賢一 / 通訳：佐藤智哉  
担当：篠本賢一、広田豹、山上優 / 制作：一般社団法人日本演出者協会  
主催：文化庁「一般社団法人日本演出者協会」平成28年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業

ウエールズ出身のジル・グリーンハーフ氏(1955〜)は、1986年、現代演劇における女性の国際ネットワーク「マグダレーナ・プロジェクト」(以下M・P)を設立、世界各地でフェスティバルを開催し、各地域で、演劇人として、女性として、生きていくことの問題に対し提言を行って来ます。今回は、氏が世界中で行っているワークシヨップ『DAUGHTERS』を世界初、男性も参加可能にアレンジし、男性6名、女性6名の計12名で行われました。参加者は、母親と自分をつなぐ思いの写真や品物を持ち参り、セミナー期間中に携帯電話などで、母親、又はその知人と連絡が取れるよう準備しました。最終日の成果発表以外は、作業に集中するため、見学不可となりました。



1日目は、参加者自己紹介のあと、自分が母親に何を求めているかを自動手記し、そこに羅列された言葉から本質的なものを選び、短くて心に響くストーリーを作り出した。2日目は、エチュードの後、各参加者に机が与えられ、持参した思いの品々を机の

上に並べ、発表のための効果的なレイアウトを模索しました。3日目は、身体訓練の後、それぞれのコーナーで、いかにパフォーマンスを展開するべきかを、用意したシヨート・ストーリー、品物のレイアウト、対面した相手を手コントロールする話術などについて個別にアドバイスがなされました。4日目は、発表に向けて、消灯された部屋で一人一人の机に小さなライトを点灯、6名ずつ交代で、パフォーマンスと観客の役割を担い、意見交換しました。5日目は、成果発表に続き、講師のワークシヨップ解説と質疑応答、そして、M・Pの解説が行われました。ゲストは、M・P参加経験者の上方舞の吉村桂充氏。世界中で展開するM・Pの日本での認知度の低さが報告されました。

今回のワークシヨップ参加者は、「作家」「演出家」「美術家」「俳優」であることが要求されました。現実のエピソードを使い、有機的でありながらも、観客への劇的效果をも追求するという、総合的な視点を持つドラマの理想形が提示されたワークシヨップでした。

## イギリス特集

英国オールド・ヴィック劇場エデュケーション部門  
ディレクターによる社会の課題に向き合う演劇ワークシヨップ

2016年11月21日〜27日(東京)、11月29日〜12月1日(豊橋)  
会場：東京芸術劇場(東京)、穂の国とよはし芸術劇場PLAT(豊橋)  
講師：シャロン・カリック (Sharon Callick) / スチュワード：メルトン (Melton) / 通訳：鈴木なお(東京)、堀ひさの(豊橋) / コーディネーター：田室寿貴子 / 担当：前嶋のの、丸知雄矢、林英尚、山上優、ほりまか / 制作：一般社団法人日本演出者協会  
主催：文化庁「一般社団法人日本演出者協会」平成28年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業

英国ヤング・ヴィック劇場、オールド・ヴィック劇場のエデュケーションプログラムに携わる講師2人を迎え、東京1週間、豊橋3日間に渡りセミナーを開催。東京ワークシヨップは定員を遥かに上回る応募があり、見学者も多かったため、会場は連日熱気に包まれていた。応募者は施設や学校で演劇教育に関わっている実演家の他、教育者、研究者、施設関係者、劇場関係者など幅広く、演劇教育に対する関心の高さが窺えた。



ワークシヨップでは、青少年や市民、特別支援教室の子ども達、移民・難民など、それぞれを対象としたエクササイズを実践。どれも気軽に参加出来る内容で、ゲーム感覚でやっていたらいつのまにか演劇的なシーンに繋がっているという流れが感じられた。

進め方の留意点、質疑応答を含みながらワークシヨップはゆとり進められて行く。すでにそれぞれの場でファシリテーターとして活動している参加者が多く、日頃から抱えている悩みについても共に考える時間となった。

無縁だった人々を劇場に招き、その人自身が誇れる作品を共に創作する。シャロンのバイタリティと行動力に感銘を受けた。熱心な参加者達はセミナー後に早速ネットワークを立ち上げ、高齢者施設を共に訪問するなど、現在も交流が続いている。今後も更なる活動に発展する事を期待したい。

レクチャーでは、多様な人種、階級社会などで人々が分断されているイギリス独自の状況の中で、両劇場がどのような取り組みをしているかについて紹介された。学校で行われるプロジェクトの他、移民・難民の青少年達と作るパフォーマンス、近親者の介護をしている人たちの作品、シリア情勢を題材にしたインスタレーション、売春婦たちの声を集めた作品などが、その始まりの部分において、シャロンはいつも情熱を持って様々なコミュニティにアプローチしている。プロジェクト中は参加者の意思に寄り添い、彼らが参加しやすい環境を整えることに力を注いでいる。演劇と



## 加藤道夫『なよたけ』を読む！

2016年9月10日～11日

会場：ストアハウス江古田スタジオ

制作：一般社団法人日本演出者協会／主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会  
文化庁委託事業、平成28年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業

加藤道夫作『なよたけ』 演出：中村喙夫  
シンポジウム「なよたけ」とその演技」 ゲスト：三田和代

リーディング演出の中村喙夫氏の、理論的な分析力を伴った演劇への熱い情熱に触れられるとても濃密かつ幸福なセミナーであった。当日パンフレットに掲載された中村喙夫氏の言葉が、このセミナーの雰囲気や十分に表していると思うため、それを以て報告とさせていただきます。

### 『なよたけ』と私 中村喙夫

この『なよたけ』の中には、古今東西あらゆる、よき演劇の中にあるべき「詩」がある。よき芸能の中にあるべき「鎮魂」がある。よき創作の中にあるべき「青春」がある。

『なよたけ』は、まさしく青春の遺書であった。あの太平洋戦争の末期、南の島におもむく二十五歳の若者が、十中九の死を覚悟した中で、昭和十九年に書き上げられ、昭和二十一年に『三田文学』に発表された。

そして昭和二十四年。私は慶応高校の二年だった。そこで新任の若き英語教師として加藤道夫と初めて出会ったのである。いきなり『ロメオとジュリエット』バルコニーの場のロメオの独白を読み上げる加藤先生の声に仰天し感動した。大学の演劇研究会に入って、再び顧問としての加藤さんと出会う。「演劇に詩を」と道夫さんは合言葉のように言った。その基点はエリザベス朝演劇を専攻した英文科時代のシエークスピアにあったのだろう。

日本の近代戯曲研修セミナー in 東京  
報告 川口典成

そして、その加藤さんに天空から雷のごとく落ちて来たのが、あの戦争が始まった頃、丸善洋書部で運命的に巡り合って熱愛した、ジャン・ジロウドウの戯曲群だった。二十世紀前半の仏演劇界に流星の如き光芒を放つ、純粹にしてたたかな劇詩人である。『オンディーヌ』『間奏曲』『テッサ』などが加藤さんに与えた爪あとは『なよたけ』の中に歴然と残っている。(略)

私は加藤さんと出会わなければ演劇を一生の仕事とすることはなかったろう。しかし何故か私は今日まで加藤さんの作品を演出したことはなかった。それは加藤道夫の自死が、学生の私に与えた衝撃の大きさが尾を引いていたのだろう。それを今回、出会いから六十年経って、この『なよたけ』と初めて向かい合う。感無量などという次元ではない。私にとってこれはまさに「奇跡」そのものなのである。



## 歌舞伎と近代戯曲 ～青果と綺堂～

2017年1月27日～28日

会場：名古屋市北文化小劇場 制作：一般社団法人日本演出者協会、「日本の近代戯曲研修セミナー」実行委員会

主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会、共催：公益財団法人名古屋文化振興事業団、北文化小劇場、協力：名古屋放送芸術家協議会、一般社団法人日本演出者協会、東海ブロック、シハイエンジン、名古屋北図書館

文化庁委託事業、平成28年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業

岡本綺堂作『番町皿屋敷』 演出：神谷尚吾、丸知亜矢  
真山青果作『頼朝の死』 演出：岡田一彦、かこまさつぐ  
アフタートークイベント ゲスト：天野鎮雄 司会：菊本健郎

ワークショップ「歌舞伎と近代戯曲」 講師：安田文吉  
パネラー：天野鎮雄、神谷尚吾、丸知亜矢、岡田一彦、かこまさつぐ

今年の近代戯曲研修セミナーは「歌舞伎と近代戯曲」をテーマに、岡本綺堂の『番町皿屋敷』と真山青果の『頼朝の死』を二本立てのリーディング公演として行いました。

ひとつの戯曲に対して、2人の演出者がそれぞれに演出するという趣向で、4人の演出者が参加しました。同じ戯曲を2人の演出者が演出する事により、それぞれの角度から戯曲への理解を深めるという試みでした。

神谷尚吾演出の『番町皿屋敷』は、全てを1人の役者がリーディングする演出。お菊、播磨を始め、性別も歳も様々な役柄を演じ分け、見応えのある公演となりました。

岡田一彦演出の『頼朝の死』は、マイクを立ててのリーディング。シンプルながらト書きやセリフを丁寧に読み上げ、音響や照明を殆ど使わず、登場人物の心情をじっくりと聞かせる演出。

丸知亜矢演出の『番町皿屋敷』は、背景

日本の近代戯曲研修セミナー in 東海  
報告 みなみ津姉



に白布を等間隔に吊り、セリフによって白布の前と布の無い大黒の前を移動して、登場人物達の心の動きを白と黒で表すという演出を試みました。

かこまさつぐ演出の『頼朝の死』は、講師がテンプよく状況を説明し、登場人物の前にはめくり台が置かれ、役者がローテーションして配役を変わって行く演出。リズムよく展開し観客の笑いを誘いました。

同じ戯曲であっても演出者が変わる事により、その表現は全く同じとしない。当たり前前の事の様ですが、実際に上演した作品を観ると、それを体感する事が出来ました。

最終公演の後には、菊本健郎司会のもと、作品を手掛けた演出家に加え、名古屋を代表する俳優天野鎮雄氏をお迎えしたアフタートークイベントも開催し、演出意図についてのディスカッションや意見交換など、戯曲を深く考察する取り組みも公開しました。

日本の近代戯曲を読む！

2017年2月4日～5日

会場・劇団未来ワークショップ  
企画制作：一般社団法人日本演出者協会関西ブロック・主催：文化庁 一般社団法人日本演出者協会  
文化庁委託事業（平成28年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業）

鈴木泉三郎作『火あぶり』『谷底』 演出：増田雄  
倉田百三作『出家とその弟子』 演出：島原夏海  
シンポジウム 講師：キタモトマサヤ、森本景文  
パネラー：正木喜勝、菊川徳之助 司会者：森本景文、キタモトマサヤ

鈴木泉三郎は、新歌舞伎の名作として現在も上演される『生きてゐる小平次』が代表作として知られる。そのため新歌舞伎・時代劇の劇作家とみなされがちであるが、当時の現代劇作家としても異彩を放っていたということとを、上演したシンポジウムを通して確認した。特に『谷底』の登場人物たちの対話の場面に顕著に表れる心理的な機微、思いとは裏腹な台詞に斬新さがあり、天折がなければ、岸田國土と並ぶ現代劇の開拓者となったのではないだろうか。上演においては「もっと作品を深めたい」と、演出家増田雄氏・出演俳優とともに、再上演を検討することになった。今回のセミナーを受けての上演に大いに期待する。

無名劇団は、横光利一などの近代文学を翻案した作品を、「無名稿」として上演してきている。『出家とその弟子』も、今後同劇団の中條岳青の脚本で上演を予定している。本作は倉田百三が26歳の時、『歎異抄』等を元に戯曲にし、思想や恋愛などを通して、青年のひたむきな思いが語られている。1918（大正7）年以来、多く上演されてきたが、長い独白が多いこともあり、「読む戯曲」とも言われている。演出の島原夏海氏は、この難しい宗教劇から恋愛を浮かび上げさせ、人間を描き出し、若い観客にも共感できる舞台



を創り上げた。

稽古だけでなく事前の研修も行い、上演シンポジウムは両日とも意義あるものになった。今回参加の2団体の真摯に取り組む姿勢に負うことが多かったと感じる。

（日本演出者協会関西ブロック役員であり、今回講師を務めた、キタモトマサヤ氏、森本景文氏のレポートをまとめ、報告致しました）

近代豆知識

近代っていつからいつまで？

1868年(明治元年)説と  
1854年(日米和親条約・開国)説とある

古代	中世	近世	近代	現代
飛鳥時代～ 平安時代	鎌倉時代～ 安土桃山時代	江戸時代	明治時代～	
マニエリスム 神楽・伎楽 猿楽・田楽	平曲 説経 節能	歌舞伎 人形浄瑠璃	(西洋文化が 入ってくる) 新派・新劇	



日本の歴史における古代・近世・近代の区分は西洋の歴史学をモデルとした明治以降の近代歴史学が使い始めたそうです。

「近世」という言葉はその三時代区分では日本の歴史をうまく捉えられないとして今のような意味で使われるようになりました。

「近代」という時代はざっくりと戦前と言われることが多いようですが大体1860年前後から1945年ぐらいまでの70年～90年間のことを言うようです。

文責・イラスト：三谷麻里子  
協力：篠本賢一



# 演出者の集い 2016

2016年12月21日(水)  
会場：座・高円寺2

実行委員長：流山児祥  
実行委員：大西一郎、貝山武久、小林拓生、佐々木治己、宮田慶子、和田喜夫

主催・企画制作：一般社団法人日本演出者協会  
後援：カンフェティ(ロングランプランニング株式会社)、公益社団法人日本劇団協議会、シアターガイド、日韓演劇交流センター、一般社団法人日本劇作家協会

開会式【開会宣言】 瓜生正美

## Program 1

「先達たちが観てきたこと、やってきたこと、伝えたいこと」

【出演】石澤秀二、貝山武久、和田喜夫  
【聞き手】宮田慶子

## Program 2

「遺言・若き演劇人のために」

【出演】中村孝夫、福田善之、ふじたあさや  
【聞き手】流山児祥、佐々木治己

## Program 3

「朗読・八人の女性演出家が《読む》村山知義と千田是也の演劇ノート」

【出演】伊東由美子、鹿目由紀、志賀澤子、西山水木、前嶋のの、松本祐子、宮田慶子、山田恵理香

## Program 4

「宣言・日本の演劇を変革=世代交代させる。」

七人の演出家によるトークセッション」

【出演】小川絵梨子、川口典成、シライケイタ、中津留章仁、中屋敷法仁、日澤雄介、御笠ノ忠次 【聞き手・進行】坂手洋二

## Program 5

「討論・演劇の行方」

【出演】大西一郎、鹿目由紀、菊川徳之助、鴻上尚史、坂手洋二、佐藤茂紀、西川信廣、西沢栄治、日澤雄介、宮田慶子、山田恵理香、流山児祥、和田喜夫

## Program 6

「日本演出者協会主催 若手演出家コンクール 2016 優秀賞授賞式」

【優秀賞受賞者】大河原準介、永野拓也、中村暢明、森田あや

※詳細は、6ページからの「若手演出家コンクール 2016」を参照。

閉会式【閉会宣言】 和田喜夫

## 和田喜夫 (一般社団法人日本演出者協会理事)

設立55周年を記念してという意図もありましたが、ともかくみんなが集まって演劇の話をしたよというのが「演出者の集い2016」の最大の目的でした。この数年、ますます演劇と社会の繋がりが弱くなっていると感じ、まず演出者が集まること、そしてそれぞれが今何を課題としているか話し、共有できることを増やし、共同でこの現状を打開できないかと思っていました。

現在の日本では義務教育で演劇を学ぶことは残念ながらほぼ無く、そのために「演劇」に関して共有する認識を国民が持っているというのが現状です。演劇がなぜこの世にあるのか、その価値が社会的に十分に尊重されている国と日本とは大きな差があります。日本では、演劇は好きな人がやるもの、観るものというのが大半の認

識でしょう。では演劇に関わっている者同士が「演劇」に関して共有する認識を持っているかと考えると非常に心もとなくなりません。

「演劇の基本は対話」と言っている演劇人が対話していないのでは、世間はどう思われても仕方ありません。話し合わなくてはどうにも前に進めない、現状を変えられない段階に来ているように感じます。演劇関係者だけでなく多くの人の対話も重要だと思っています。

今回の集いは平日にもかかわらず多くの方が来て下さいました。感謝の思いでいっぱいです。もちろんこの一日だけでは不十分です。ほんの一步です。今後の課題は、いかにこのような場を継続してゆかかです。個人化が進み、人々がお互いに遠ざかろうとしている危機の今こそ、演劇は重要なものとなることを確信して次の一步を実施しなければと思っています。



## 流山児祥

(実行委員長)

とにかく《演劇の現在》について語り合おうぜ！というコトで「演出者の集い2016」をやることにした！

2011年3月に「日本演出者協会発足50周年演出者の集い@下北沢本多劇場」を準備していたが東日本大震災で自粛し、急遽、被災地支援プロジェクトの活動を始めた。あれから6年、20代から90代の演出家600名余りが所属し様々な事業を全国で展開している協会メン

バーが気楽に集まり「日本演劇の過去・現在・未来」について語り合う「集い」を「自主(ポランティア)事業」として企画・進化した。協会発足時のエピソードや福田善之、ふじたあさや、中村孝夫の先輩演出家から若き演劇人への「遺言」。村山知義千田是也の「演劇ノート」リーディング。協会若手人気演出家のトークバトルと百家争鳴で楽しかった。「遺言」はぜひシリーズ化したいものである。みなさん長生きしてくださいね。

若手演出家コンクール表彰式&恒例の大忘年会のカップリング。この試みは大成。出来れば、歳末恒例にしたいもの。春の若手演出家コンクール、年末「演出者の集い」。次は、俳優さん達にもお願いしてもっと派手にやれたらいいですね。多くの皆様のご協力でなんとかやれました。本当に感謝しています。また、やろうぜ！

佐々木治己（実行委員）

演出者の集いの担当になると、いろいろな人から優しくされた。励まされ、同情され、気の毒がられた。「船頭多くして船山に登る」と言くと、物事が進まない様を想像してしまいがちだが、「船山に登る」という方に注目すると、途端にわくわくもする。船が山に登ってしまうのか！ 演出者協会に関わるたびに思うのが、いつもこれだった。演出者の集いにして、「なかなかな山には登れず、キチンと船は進む」。それなりに貴重な話や消化不良話を聞きながら、終わってしまった。

個人的には、千田・村山演劇論リーディングの準備のため、久しぶりに千田是也演劇論集や村山知義戯曲全集などをひっぱり出して読んだことや、「遺言」で福田善之さん、中村孝夫さん、ふじたあさやさんからお話を聞けたのは有意義だったが、もう少しひとりひとり掘り下げて聞ける時間が必要だと思われた。とはいえ、そんな時間は与えられず、船は山に登れない。

しかし、演出者の集いが不要かと言われれば、私はそうは思わない。気の毒がられながらも、調整をしながら、演出家たちを集めて、船頭を増やして、一堂に会し、そんな場にしていると、山に登っているようなそんな気もしてくるものだ。シンポジウムなどのトークはいつでも予定調和的なものに落ち着いてしまうけれども、集いの後に飲みながら話したトークは山に登っ

ていったのかもしれない。次は、3人くらいの発表者の話を聞いて、議論するような場を作ってはどうかだろうか？

**Program1**  
「先達たちが観てきたこと、やってきたこと、伝えたいこと」

報告Ⅱ宮田慶子

まずは貝山氏が、膨大な資料の中からまとめてくださった200枚近くにも及ぶ写真をスライドで紹介しながら、主に1974年の演出者協会再発足の時期から2000年頃までの活動を、「演劇大学」「会員交流」「国際交流」の3つの軸に沿って、お話を進めてくださった。

「演劇大学」のさきがけとなった、1978年の「山梨県清里清泉寮・演劇大学」では合宿生活の中、1本の台本を、ミュージカル、芝居、狂言の3つの発表会にまとめあげたことなど、懐かしい

思い出話とともに、その柔軟な取り組み方と熱量が、現在に至るまでの「演劇大学」の活動の基盤となったことを、あらためて実感させられた。「会員交流」では、「忘年会」や「文士劇」ならぬ「演出家劇」のスナップ写真に登場する、先輩協会員の面々のほつらつたる若き姿に、会場からも感嘆の声があがった。「国際交流」では、

1992年「第1回日韓演出家会議」を皮切りに、95年「日中演劇フォーラム」を開催、98年には「東南アジア演劇研修セミナー」へと展開した足跡をたどり、石澤氏がさらに詳細な経緯や、助成金の流れも含めて、「国際交流」の意義と魅力についてお話しくださった。「国際交流」こそ、若手が参加することが将来を作る！ という石澤氏の言葉が強く残った。

最後に和田理事長が演劇大学・国際交流のこれからの課題をまとめ、プログラム1は終了した。70〜90年代に行われた各事業の規模

の大きさ、理念の確かさに、「しっかりしろ」と背中を叩かれた気がした。

**Program2**  
「遺言・若き演劇人のために」

報告Ⅱ中村孝夫

「遺言」という言葉を聞いてすぐ頭に浮かんだのは「そんなの無えよ」という返事だった。

多分横に並んだ福田善之、ふじたあさや両氏も同じだったのではないかと推測する。3人も歩んだ道は違って、演劇を愛し、一生の仕事とし、八十代の現在も演劇の世界に生きている（他に生きる場はない、と言っべきか）ということは一緒である。だから今ここに存在することが一種の遺言だとも言うておこうか。「老いてますます初心」という言葉が偶然発せられ座に肯定された。私個人のことでは、昨秋、協会の近代戯曲研修セミナーで演出し

た加藤道夫の「なよたけ」のことを語った。加藤さんは私の高校時代の英語の先生であり、その授業の初めに「ロメオとジュリエット」のバルコニーの場を取上げ、学生でうまく行かぬと見るや、自ら朗々たるキングス・イングリッシュでロメオの独白を朗読した。その加藤さんの声音が今も耳に残る。それが私を演劇の世界へ連れ込んだ原点だとすると、67年たつてその人の代表作と初めて真正面から対したのは一種の奇跡であった。

その近代劇の次回は福田氏が木下順二「風浪」を演出する予定。氏は最近「虎よ虎よ」という戯曲を書いて伏えた。ふじた氏の「臨界幻想」が再演され、原発問題の現在を30年前に予言しているのに驚愕したのは記憶に新しい。ふじた氏は国際児童青少年舞台芸術協会の理事として世界を飛び廻っている。遺言などしている暇はないのである。

**Program3**

「朗読・八人の女性演出家が『読む』村山知義と千田是也の演劇ノート」

報告Ⅱ鹿目由紀

『演出者の集い』で朗読を、というお話をいただいた時には、目玉が飛び出るかと思いました。また、一緒に朗読される方々が尊敬する方々ばかりで、こいつはやばいなと思えました。おまけに、松本祐子さんと共に読ませていただくうえに、トップバッターだと知った時には、緊張で吐き気を催

## 演出者の集い 2016





しました。けれど、やれて良かったと思っっています。

「演出やってます」と周りに胸を張って言えるほどのことを、いまだ何も出来ていないと想う日々です。なにか足りない、なにかダメだ、自分と苦悩しながら現場でひとびと向き合う毎日が続きます。そのような毎日には時に客観性を欠き、もしくは一歩間違つて、客観性を欠いている自分すら見失うことになりかねない、と思っただりします。ですので、「演出家」でなく「演出者」協会とされた意味を改めて感じ、「演出家」だけの寄り合いでなく、「演出者」一般のためのものだ」という村山知義さんの遺志に触れ、本番は言葉が発することに、励まされる思いでした。

先達の演出者の放った言葉を、人前で（しかも多くの演出者の前で）声に出して読む経験は、なかなか出来ることではありません。千田是也さんの「芸術が大眾から離れてあるとも思っていない。また大眾が芸術から離れて存在するとも思っていない」という西山水木さんの最後の朗読が、心に染みしました。

自分を見つめ直すという意味で、ありがたい機会をいただきました。

**Program4**  
「宣言・日本の演劇を革新」  
交代させる。七人の演出家による  
トークセッション」

報告 日澤雄介

集まったのは、それぞれ活躍す



る場も違えば演劇の方向性も違つて7人。同世代でこれだけの面子をよく集めたものだ、周りを見回しながら感心してしまいました。ただ、これだけバリエーション豊かな方々がいる割には話の方向性が上手に進まなかつたようにも感じました。議題にあるような、この世代ならではの演劇観や他の世代との違いなどをもう少し掘り下げるには、準備も時間も足りなかつたように思いました。

とはいももの、個々人の持つ価値観や演劇界の現状についての思いなど、様々なお話を聞くことが出来ました。

その中でも一番興味深かつたのが、俳優の演技について。先程も書いたとおり、7人とも独自の違う演出家ですが、こと俳優の演技（いい演技とは？）についての見解にはぼんやりがなかつたというのは、我々の世代が持つ共通の価値観なのかもしれません。作品の質、演技の質は違いますが、そこに

る俳優のやらなければならぬ仕事は変わらない、みたいな。俳優が獲得すべき身体とは、みたいな。言い方は様々でしたが、言わんとする核は同じに感じました。それは嬉しくもあり、そして、同じモノを求めているのに演出家が違つと（戯曲も違いますが）出現する作品がこつも違つものになるのかと、驚いてしまいました。

**Program5**  
「討論・演劇の行方」

報告 菊川徳之助

開会宣言から各パートの、面白い、記憶に留めたいトークを聞いて来て、疲れた頃に「演劇の行方」という討論の出番がやって来た。何故か、演出者協会の理事が集められた13人。金曜日ではなかつたが13という避けたい人数の数字。いやな予感がしたが、優しい司会者の計らいで、全員が先ずは一言ずつ喋る。しかも、2回も

発言する機会があつた。想定外だ。最近、身辺で興味を持つことや関心のある問題、を吐露する。その発言に集中して行けば、それだけで終了だつただろうが、そこは問題意識の多い演出者ぞろい、話は広がる。

和田理事長の発言の一つに注目した。若い人が戯曲を読まない。学校に演劇が入っていない。演劇部はあるが、授業科目には演劇は無い。芸術科目に音楽、美術、図工などあるのに演劇は無い。近年、学校が設定できる科目が認められて、演劇を授業科目に入れる学校もあるが、文科省が学校に設置する演劇は、小学校、中学校、高等学校に無い（高校に数校演劇科がある）。大学でも700校はあるだろうが、演劇科がある大学は、十数校だろう。私学なら自由に学部申請できるのに、である。そう言えば、日本には、演劇大学は無い。演劇学部も無い。やつと芸術学部の中に演劇学科があるという

貧困状態である。義務教育の学校に演劇教育を入れて欲しいし、演劇を学ぶ環境を日本演出者協会がもっともつと行動しなければならぬだろう。真剣で面白いシンポジウムだつた。

◆◆◆  
報告 鴻上尚史

まあ、人数が多いわけで、時間も短いわけで、そこで具体的に実践的な話し合いを期待する方が無理というもので、それでも、あれだけの数の演出家が集まり、演劇についてあれこれと話し合うことはとても意味があつたと思います。和田理事長のおっしゃつた、高校演劇部が歴史とか蓄積とか、今までの演劇とは関係のない所から始めている、という話は全くその通りで、じつに演劇というジャンルのやっかいさをあぶり出しているなと感じました。これが音楽なら、今までの音楽を聞けばいいし、映画ならDVDを見ればいい。演劇は、演劇部に対して「日本と世界にはこんな演劇があるんだよ」とうまく説明できるものがあればいいなと心底、思います。

戯曲に対する関心のなさも含めて、せめて高校演劇部に対して、「これが演劇なんだよね」と言える何かを作っていくことはとても大切だと思つています。それは、じつは、高校演劇だけではなく、この国の演劇の地平を広げていくことになると感じます。

# 公演の際に《チラシ》は必要だと思いますか？ それとも不要だと思いますか？

随分前から「チラシの折り込みや置きチラシにはどの程度の効果があるのか？」といった議論を耳にしてはいましたが、ここ数年、若い世代を中心に、公演の際にチラシを作成せず、web媒体だけで宣伝する団体が増えてきたように感じます。その背景には、メールで気軽に公演のお知らせ（チラシのデータなど）を送れるようになった結果、コスト削減にも繋がり、チラシを郵送する機会が減ったことも影響しているのではないのでしょうか。演劇界にとって当たり前の存在だった《チラシ》は、必要か？ それとも不要なのか？ あなたの率直なご意見をお聞かせください。（編集部）

北海道 浦竜也  
（紹介者／前田透）

売り出していくコンテンツのターゲットによって広報の手段は変える必要があると考えます。

若年層を中心としたSNSを身近に生活している客層をターゲットとしてしているカンパニーの場合は、紙媒体を廃止し、その分チラシデータ作成や、ホームページコンテンツの充実、SNSの有料広告での情報拡散などを行うのが効果的であると感じます。もちろん、出演者や作品の内容、カンパニーの固定客の世代によってはその限りではないかと思いますが。

紙媒体の魅力は「人から人の手に渡る事」「誰かに見てもらうために作られたもの」だと思います。もちろんLINEやメールにチラシのデータを添付してしまえば必要な情報を相手に届けることが可能です。大手のカンパニーであれば、それで集客は見込めるのかもしれませんが、しかし若手劇団、しかも作風や出演者すらわからない劇団の作品をメールやWEBで見ただけで集客できはしないと思います。

カンパニーの人間が「チラシを名刺代わり」に配り歩き、コ

ンテンツの素晴らしいさを直接クライアントにプレゼンしていく為には、チラシは不可欠なものではないかと考えます。顔を付き合せて、チラシを渡せば、顔が見えない連絡方法よりも熱意や誠意が伝わり、コンテンツへの関心も湧くと思います。

東北（秋田）加賀屋淳之介  
（紹介者／吹雪ヒュン）

これだけ情報化社会となってもまだまだネット社会に懐疑的な昭和世代です。ネットやメールでの情報拡散でチラシを作らない、というケースがあるというところに正直驚いている状態です。たしかに、興味を持っていただける方にピンポイントで情報を打っていく、ネットを使って案内していく、というのは効率を考えると有効なのかもしれませんが、ただ、当地秋田のような地方ではチラシやポスターのような紙媒体のほうがまだ圧倒的な信頼性がありますから、ネット経由での情報提供を告知のすべて、とするのには相当勇気がいられます。

また、チラシは単に公演情報を伝えるツールではなく、ひとつの美術的的作品でもあり、演劇作品をつくる劇団やユニットの

イメージや美的センスを含んだ《体温》のようなものを、観客となりうる可能性のあるたくさんの方々の手元に直接届けられる絶好の機会なのではないかと私は感じます。

ネットでの情報提供は、意識をして情報収集する人でない限りは「背中にテープで張り付けられた張り紙」のようなものではないでしょうか。

中部・甲信越（石川）本庄亮  
（紹介者／北山久美子）

必要。

まずWEBやSNS、メールなどのネット媒体は利用する人も多く発信も容易で目にしてもらえる確率は高いといえます。しかしネット媒体は「手にとつて見る」という意識的な動作を省いていたり、流れてくる頻度が多かったり、様々な要因で流し見をしてしまう傾向にあるのではないのでしょうか。演劇にも様々なジャンルや様式があり、ニーズも様々でチラシは必要ないという考え方の団体もあると思います。ただ私達の劇団はチラシに必ず上演する作品の核になる考えや視点を示す文章を掲載し、そしてそのイメージを喚起するデザインを志向していま

す。情報量としては他の劇団よりも多いと思います。だからこそ私達の作品に興味を持ってもらうには直接手にとって見てもらえる紙媒体が有効だと考えます。

関東（東京）前嶋のの  
（紹介者／秋葉由美子）

必要だと思います。確かに、公演の情報を得るのにはすでにインターネットで事足りるのかもしれませんが。この先誰もが見られなくインターネットになじむようになれば、ますますチラシの必要性は薄れていくでしょう。でも、私は様々なチラシを手にとって眺めるのが好きです。あのサイズの中に、選り抜かれた言葉や内容をイメージさせるビジュアル、必要な情報が良いあんばいで詰まっている。インターネットが多くの情報を得られるツールなのにに対し、チラシはイメージが凝縮された「作品」の要素があるのだと思います。実際に触れて眺めて、公演の味わいのようなものを楽しむことができます。思いがけず手にしたチラシがきっかけで劇場に足を運ぶ事もあるし、感銘を受けた公演のチラシはとっておいて、後で見返して



興奮を思い返したりもする。チラシにはそういう魅力もあるでしょう。だから10年後も100年後も、演劇公演の最初のイメージを紙の作品にすることを、みんなやめないうで欲しいと思います。

東海(愛知) かしましげみつ  
(紹介者/小熊ヒデジ)

インターネットでの情報共有の比重が大きくなってきている。多くの人がスマートフォンを持つようになったこともあり、近年ますます加速している。若手による小規模な公演などでは、チラシ配布が一切なくても動員できていくケースも出てきている。ターゲットとなる客層と公演規模によっては、チラシ配布が行われない機会は今後増えていくだろう。とはいえ、宣伝経路は複数あった方が単純にリーチの範囲も確率も上がるため、必要ないという結論は早計だと思う。特に生身の観客が足を運ぶ演劇という場において、紙媒体が全く必要なくなるという事はないだろう。

普段からインターネットを利用する身として、演劇公演におけるWEB媒体の重要性はむしろまだまだ軽んじられていると

感じる。検索しても未だに公演情報すら見つからないことさえある。例えば公演情報の一覧や地域ごとのニュースの収集・配信が普及すれば、小劇場シーンをもっと盛り上がるのではないかと。近年現れつつあるそれらに期待を寄せているのだが、一般にまで広く普及するにはまだ程遠い現状である。

関西(大阪) 田中孝弥  
(紹介者/鳥守辰明)

《チラシ》は必要だと思いません。

ただし、公演日時・会場・料金・チケット入手方法と出演者の顔ぶれくらいしか載っていない《チケット購入の取扱説明チラシ》、言い換えれば、劇団(あるいはプロデュース団体)の信用買だけで、チケットを販売しようとする目的の《チラシ》ならば、不要だと思えます。

内容もしくは、上演のポイントが分かること。「今、その作品を上演する意味」や「パブリックな空間でその作品を観客と共有する意味」、「この日、この時間、ひとつの場所に人々が集う意味」を書き込んだ《チラシ》を作ることが大事だと思えます。

多くの情報が行き交う時代だからこそ、《演劇で表現しなればならないことが読み取れるチラシ》を作らなければ、人々の目に止まることなく、ただ情報の波に押し流されてしまつてはいませんか。

もちろん、インターネットが発達した社会ですから、ウェブでの告知も上手に利用しなくてはなりません。しかし、劇場に足を運ぶという、おおよそ「手軽さから最も遠い表現」の告知なのですから、その表現意図を読み取れる《チラシ》を作るべきだと思えます。

中国・四国(徳島) 丸山裕介  
(紹介者/岡田敬弘)

チラシは必要。ただし、紙媒体である必要は無いかもしれませんが。

お客様が何を元に劇場に足を運んでくださるのか。好きな役者や演出が居る等、様々な理由があります。そういうお客様は能動的にその劇団の情報を得て劇場にいらっしゃると考えられます。

では、まだ劇団のことを知らない潜在的なお客様に訴求するには、目に触れる機会を多く

する必要があります。そのために、目に止まるデザイン&コピーを創る。それはSNS上で拡散を狙う際も同様です。その公演に対して、企画やコンセプトを外部に訴える為にチラシを含めた広報媒体のデザインは非常に重要です。そしてそれはお客様に対してまず主催側が出来る最初の表現活動です。

そう考えるとやはり紙である必要は無いかもしれませんが。

たとえば、名刺型のカードにQRコードを印刷しておいて、公演特設のランディングページをHTMLで作成するというのもチラシです。ただ漠然と公演があるからチラシを作ろうというのは、マーケティングに対して弱いでしょう。

九州(福岡) 木村佳南子  
(紹介者/中嶋さと)

公演をするにあたっての《チラシ》は必要だと思えます。

SNS等で情報発信が容易になっただけで、紙媒体の情報発信は別の意味を持ってきているのではないかと感じています。日程や会場、金額といった公演概要は情報でしかなく、それだけを知りたいという場合はWEB媒体で事が足りるでしょ

うし、どちらも容易に発信と受信ができます。そのなかで、敢えてコストが掛かる紙媒体で情報を発信するという場合、情報だけではなく、上演する舞台のイメージを想起させるデザインや紙質、紙に印刷した文字だからこそ伝えることができるニュアンスなどが強みになるのではないのでしょうか？ 宣伝美術は昔からありますが、より演出的意図を含ませることが出来る媒体になっていのだと思えます。また、紙媒体はWEBとは違い、「どこで手に入れたか」という入手先が現実存在します。配布先をこちらが選ぶことができるということは、チラシそのものに希少性という付加価値を付け足せると思えます。そのような配布先自体を舞台に合わせて演出する等、WEB媒体があるからこそ、紙媒体であるチラシも発展していくのではないかと考えています。

## Facebook ページ 更新中!

「日本演出者協会  
Facebook」で  
検索してみてください。

## 総会報告

今年度は演劇大学や国際演劇交流セミナー等の協会事業が夏に集中したことから日程調整が難しく、事務局長2名、監事1名が欠席という異例の状態での開催となった。議長は和田喜夫理事長。

2015年度の活動報告では、各事業の報告の他、「演劇大学」と「日本の近代戯曲研修セミナー」双方の連携の可能性、「若手演出家コンクール」の選考基準や審査のあり方、出版事業で長年お世話になったれんが書房新社の廃業など、報告以外にも話題が尽きなかった。

海外研修員の推薦は、大澤遊、



河田園子の2名に決定。

会計報告では、一般会計、特別会計、各団体からの助成金ともに良い結果を残したが、会費未入金については今回も解決できず、課題として残った。

また、ブロック報告として、東海ブロック、関西ブロックから詳細な活動報告があり、各ブロックの枠を超えた交流の機会を望む声が上がった。

### 平成28年度

#### 一般社団法人日本演出者協会

#### 定例総会

2016年8月7日(日)

13時〜17時

芸能花伝舎

#### 議事

- 1、2015年度活動報告
- 2、2015年度会計報告
- 3、2016年度事業計画
- 4、2016年度予算計画
- 5、その他(地域ブロック報告)

日本演出者協会の運営は協会費で行われております。

会費未納の方は、早急に納入をお願いいたします。

## 一般社団法人 日本演出者協会 事業担当者名簿

2017年3月現在

### 理事・役員一覧

【理事長】和田喜夫

【副理事長】宮田慶子、流山児祥

【常務理事】大西一郎、小林七緒

西沢栄治、日澤雄介

【理事】青井陽治、岩崎正裕、鶴山仁、菊川徳之助、鴻上尚史、齋藤歩、坂手洋二、佐藤茂紀、田中孝弥、西川信廣、はせひろいち、ふじたあさや、松本祐子、山田恵理香

【理事・事務局長】大西一郎、小林七緒

【監事】外波山文明、福田悦雄

【評議員】瓜生正美、貝山武久、栗山民也、中村孝夫、福田善之

事業担当一覧

○演劇大学【部長】小林七緒

〈北海道〉斎藤歩〈北陸〉井上ほーりん〈東北〉坂田裕一、佐藤茂紀、高橋純、新田満、吹雪ヒュン〈関東〉スズキ拓朗、土田英生、西垣耕造、西沢栄治、日澤雄介、宮田慶子、流山児祥〈東海〉平塚直隆、鹿目由紀〈関西〉岩崎正裕、木嶋茂雄、高橋恵〈四国〉岡田敬弘、吉本ちか子〈九州〉大場久路、清末典子、木村佳南子、

田坂哲郎、山下キスコ、山田恵理香

○国際演劇交流セミナー【部長】篠本賢一【事務担当】前嶋のの

〈北海道〉前田透〈北陸〉岡井直道〈東北〉伊藤み弥〈関東〉青井陽治、家田淳、大橋宏、貝山武久、川口典成、黒川逸朗、小林拓生、坂手洋二、佐川大輔、佐々木治己、左藤慶、杉山剛志、さゝ、土山紘史、中野志朗、林英樹、広田豹、洪明花、三輪えり花、森井睦、山上優〈東海〉ほりみか、丸知亜矢、本島勲、小熊ヒデジ、前川達次郎〈関西〉井之上淳、今泉修、坂手日登美、島守辰明、全リンド、田中孝弥、棚瀬美幸、土橋淳志、堀江ひろゆき、山口浩章〈九州〉五味伸之、日下部信、山田恵理香

○日本の近代戯曲研修セミナー

【部長】青井陽治

〈北海道〉清水友陽、田中春彦

〈東北〉渡部ギユウ〈関東〉川口典成、黒川逸朗、黒澤世莉、篠本賢一、中村孝夫、林英樹、丸尾聡

〈東海〉齋藤敏明、菊本健郎、はせひろいち、岡田一彦〈関西〉井之上淳、笠井友仁、金子順子、菊川徳之助、木嶋茂雄、田中孝弥、棚瀬美幸、椋平淳、森本景文、山

口浩章〈九州〉山田恵理香、山純平

○若手演出家コンクール

大西一郎、小林七緒、西沢栄治

○教育・出版

坂手洋二、佐々木治己、篠崎光正

○広報【部長】秋葉由美子

〈関東〉大西一郎、栗原秀一、篠崎光正、篠本賢一、藤間健、三谷麻里子、緑川憲仁、流山児祥〈東海〉ほりみか〈関西〉木嶋茂雄、田中孝弥、菊川徳之助〈四国〉鈴木美恵子〈九州〉糸山裕子

○法務 西川信廣、鶴山仁、小林七緒、藤間健

○地域交流

〈東北〉佐藤茂紀、なかじょうのぶ、渡部ギユウ〈関東〉鴻上尚史、流山児祥〈東海〉はせひろいち〈関西〉岩崎正裕〈九州〉村山精一、山田恵理香

○観劇案内

〈関東〉遠藤栄藏〈東海〉金子康雄〈関西〉木嶋茂雄

○日韓演劇交流センター

シライケイタ、松本祐子

○事務局

〈本部〉秋葉舞滝子、荒川貴代、上田郁子、清水直子〈東海ブロック〉金子康雄〈関西ブロック〉木嶋茂雄



# 理事会報告

2016年 1月28日(木) 11時~13時

場所：協会事務所

出席者：青井陽治、岩崎正裕、大西一郎、小林七緒、佐藤茂紀、西沢栄治、はせひろいち、日澤雄介、宮田慶子、流山児祥、和田喜夫、11名(委任8名)

- 1 演劇大学(inくだまつ、はちのへ)
- 2 国際演劇交流セミナーメキシコ特集
- 3 日本の近代戯曲研修セミナー(in東海、関西、東京)
- 4 若手演出家コンクール2015最終審査
- 5 若手演出家コンクール2014記念公演
- 6 日韓演劇作品交流プロジェクト(劇団ハバサールカス公演)
- 7 ソウル演劇祭(弦巻楽団公演)

3月2日(水) 11時~13時

場所：協会事務所

出席者：青井陽治、大西一郎、菊川徳之助、齊藤歩、佐藤茂紀、坂手洋二、西川廣信、ふじたあさや、宮田慶子、流山児祥、和田喜夫、11名(委任9名)

- 1 若手演出家コンクール2015最終審査
- 2 日韓演劇作品交流プロジェクト(劇団ハバサールカス公演)
- 3 若手演出家コンクール2014記念公演
- 4 日本の近代戯曲研修セミナー(in東海、関西、東京)
- 5 ソウル演劇祭(弦巻楽団公演)
- 6 年鑑「国際演劇交流セミナー2014」発行について
- 7 《その他》新理事の紹介と抱負、文化庁への事業報告内容、東京演劇大学連盟の事業協力、事業担当者について

4月7日(木) 11時~13時

場所：協会事務所

出席者：青井陽治、大西一郎、鶴山仁、小林七緒、岩崎正裕、佐藤茂紀、坂手

洋一、はせひろいち、日澤雄介、ふじたあさや、西沢栄治、山田恵理香、流山児祥、和田喜夫、14名(委任7名)

- 1 若手演出家コンクール2015最終審査
- 2 日韓演劇作品交流プロジェクト(劇団ハバサールカス公演)
- 3 日本の近代戯曲研修セミナー(in東海、関西、東京)
- 4 若手演出家コンクール2014記念公演
- 5 ソウル演劇祭(弦巻楽団公演)経過報告
- 6 年鑑「国際演劇交流セミナー2014」配布報告
- 7 協会誌「D」担当について

5月10日(火) 11時~13時

場所：協会事務所

出席者：常務理事(大西一郎、小林七緒、西沢栄治、日澤雄介、宮田慶子、流山児祥、和田喜夫)、7名

- 1 日韓演劇作品交流プロジェクト(劇団ハバサールカス公演)
- 2 ソウル演劇祭(弦巻楽団公演)
- 3 演劇大学(in大分、函館)報告
- 4 国際演劇交流セミナー(メキシコ、アフガニスタン、韓国)
- 5 若手演出家コンクール2016の方針
- 6 協会誌「D」の担当について
- 7 《その他》九州ブロックの立ち上げについて、演劇の教科書を作る可能性

6月17日(金) 11時~13時

場所：協会事務所

出席者：常務理事(大西一郎、小林七緒、西沢栄治、日澤雄介、宮田慶子、流山児祥、和田喜夫、広報部(秋葉由美子)8名

- 1 演劇大学(inくだまつ、大分、函館、内子、山形)
- 2 国際演劇交流セミナー(メキシコ、アフ

ガニスタン、韓国) 日韓演劇交流センターの社団化 熊本の震災支援 協会誌「D」の内容について 《その他》定款書類の内容更新、事務局体制について

7月15日(金) 11時~13時

場所：協会事務所

出席者：常務理事(大西一郎、小林七緒、西沢栄治、日澤雄介、宮田慶子、流山児祥、和田喜夫、広報部(秋葉由美子)8名

- 1 演劇大学(in大分、函館、内子)
  - 2 国際演劇交流セミナー(メキシコ、アフガニスタン、韓国)
  - 3 日本の近代戯曲研修セミナー(in東京、東海)
  - 4 アジア青空劇場フェスティバル
  - 5 協会誌「D」スペシャル号
  - 6 55周年記念「演出者の集い」
- 《その他》フェニックスプロジェクト、熊本の震災支援、定例総会の準備経過、来年度の文化助成申請事業案、れんが書房廃業について

8月7日(日) 11時~13時

場所：協会事務所

出席者：菊川徳之助、坂手洋二、佐藤茂紀、西沢栄治、日澤雄介、宮田慶子、流山児祥、和田喜夫、国際部(篠本賢一)、広報部(秋葉由美子)10名(委任3名)

- 1 定例総会の議題と進行について
- 2 演劇大学(in函館、内子、さかいで)
- 3 日本の近代戯曲研修セミナー(in東京)
- 4 若手演出家コンクール2016一次審査
- 5 フェニックスプロジェクト
- 6 アジア青空劇場フェスティバル
- 7 55周年記念「演出者の集い」
- 8 《その他》協会誌「D」について、熊本の震災支援、海外研修員

9月28日(水) 11時~13時

場所：協会事務所 出席者：常務理事(西沢栄治、日澤雄介、宮田慶子、和田喜夫、国際部(篠本賢一)、広報部(秋葉由美子)6名

- 1 事業担当者名簿
  - 2 若手演出家コンクール2016一次審査
  - 3 演劇大学(in内子)
  - 4 アジア青空劇場演劇フェスティバル
  - 5 国際演劇交流セミナー韓国特集
  - 6 東京演劇大学連盟ワークショップ
- 《その他》来年度の事業予定、協会誌「D」、日韓演劇交流センター委員会、演出者の集い2016

11月8日(火) 11時~13時

場所：協会事務所

出席者：瓜生正美、大西一郎、貝山武久、菊川徳之助、佐藤茂紀、宮田慶子、流山児祥、和田喜夫、8名(委任13名)

- 1 演劇大学inやまがた
  - 2 国際演劇交流セミナーウェールズ特集
  - 3 来年度の事業計画
  - 4 演出者の集い2016
- 《その他》劇場が減少している問題について、協会誌「D」

12月21日(水) 10時30分~12時30分

場所：座・高田寺2

出席者：瓜生正美、大西一郎、貝山武久、金子康雄(代理出席)、菊川徳之助、鴻上尚史、小林七緒、坂手洋二、佐藤茂紀、日澤雄介、松本祐子、宮田慶子、山田恵理香、流山児祥、和田喜夫、広報部(秋葉由美子)16名(委任4名)

- 1 アジア青空劇場フェスティバル
- 2 演劇大学(inきたかみ、やまがた)
- 3 国際演劇交流セミナーイギリス特集
- 4 協会誌「D」
- 5 「関西新劇史」への支援
- 6 演出者の集い2016、大忘年会

2017年 1月20日(金) 11時~13時

場所：協会事務所

出席者：常務理事(大西一郎、小林七緒、日澤雄介、流山児祥、和田喜夫、広報部(秋葉由美子)6名

- 1 演劇大学(inくだまつ、大阪、今後の開催候補について)
  - 2 若手演出家コンクール2016
  - 3 日本の近代戯曲研修セミナーin東京
  - 4 協会誌「D」
  - 5 日韓演劇交流センター、ソウル演劇協会との連携事業
- 《その他》今年の目標、協会員の交流の場づくり、総会の日程について

2月9日(木) 11時~13時

場所：協会事務所

出席者：常務理事(大西一郎、小林七緒、西沢栄治、流山児祥、和田喜夫)5名

- 1 日本劇団協議会、日本劇作家協会との共同企画
  - 2 日本の近代戯曲研修セミナーin大阪
  - 3 若手演出家コンクール2016
  - 4 「国際演劇交流セミナー2015」年鑑
- 《その他》韓国との交流(文化省の署名、POの推薦、協会誌「D」、全体理事会の日程について)

3月4日(土) 13時30分~15時30分

場所：ねご印工務店稽古場

出席者：青井陽治、鶴山仁、大西一郎、菊川徳之助、小林七緒、坂手洋二、佐藤茂紀、西川廣信、西沢栄治、日澤雄介、松本祐子、流山児祥、和田喜夫、広報部(秋葉由美子)、事務局(荒川貴代)14名(委任7名)

- 1 日本の近代戯曲研修セミナーin大阪
  - 2 演劇大学in大阪
  - 3 若手演出家コンクール2016最終審査
  - 4 日韓演劇作品交流プロジェクト
  - 5 「国際演劇交流セミナー2015」年鑑
- 《その他》日本劇団協議会、日本劇作家協会との共同企画、協会誌「D」、フェニックスプロジェクト、新年度事業、総会の日程について

## 震災と劇場

東日本大震災から6年が過ぎ、2016年には4月の熊本地震、10月の鳥取県中部地震と、大きな地震が続きました。

震災の度に真っ先に聞こえてくるのは「劇場が使用できない」という〈劇場を利用する側〉の声。では逆に、劇場の関係者は震災の経験から何を想い、どんなことを試みているのか。前号に続いての被災地特集。今号では「震災と劇場」というテーマで、劇場と関わりの深い方々からお話を伺いました。

## 各地域 活動通信

### 被災地特集

#### 【宮城県】

都甲マリ子

劇団「スイミーはまだ旅の途中」主宰／いしのまき演劇祭実行委員長代表

宮城県石巻市では「(仮称)石巻市複合文化施設」という公共文化施設が2020年度に竣工予定となっています。これは先の東日本大震災で被災した石巻市民会館と石巻文化センターの代替施設として建てられるもので、大小のホールと博物館機能を持ち、地域の文化活動の拠点となる複合文化施設です。

2016年4月にホールの大きさや駐車場など施設の全体的な基本構想が石巻市によって提示され、10月にはプロポーザル形式による設計者の選定がなされました。今後は石巻市と選定された設計者、そして石巻市民の3者で互いに意見を交換し協力しながら、実施設計に入っていきます。

基本構想ができるまでに石巻市で実施されたヒアリングでは、主に震災前から活動していた文化団体など



石巻の文化施設について考えたり語りたりする会

が意見集約の主体となっていました。将来的に施設の使い手となる次世代の意見や、潜在的な利用者層の意見が不足していました。

そこで私たちは2016年8月から「石巻の文化施設について考えたり語りたりする会」という名前で活動をはじめ、石巻市内の演劇関係者や地元ミュージシャンやDJといった主に若手の表現者や、今まで特定の文化組織に所属していなかった方々の意見を取りまとめる受け皿となってきました。

これから施設の竣工までに、石巻市による公開のワークショップや説明会などが何度か行われる予定ですが、そこにはより多くの市民の方々に参加してもらいたいと考えています。しかし同時に、それぞれが自分たちの活動に都合の良い意見を言うだけでは、生産性のある議論になりにくいのではないかと考え、現在では月に1度、公共ホールについてのリテラシーを高めることを目的として、全国の魅力的な公共ホールやその運営について学習したり、発案のためのワークショップを行ったりしています。

「自分たちの文化は、自分たちでつくり上げていきたい」そんな思いで活動しています。これからの石巻の文化動向にぜひご注目ください。

#### 【福島県】

志賀野桂一

「白河文化交流館「ミネス」館長

あの東日本大震災から6年が過ぎました。

発災当初の混乱期から私も正気を取り戻すのに半年かかった思いがあります。

文化芸術に関わる実践している者として最初に取り組んだのが被災した団体個人の文化の活動(本体)への支援組織「アーツエイド東北」の立ち上げでした。

28年度を持って解散し、支援金の継続は「公益財団法人地域創造基金さなぶり」に引き継がれました。この間様々な復興支援を冠した文化事業に取り組んできましたが、その中で私も実行委員の1人で演出を担当してきた「かたりつぎ」を紹介しておきます。

「かたりつぎ」の企画は、神戸と仙台の人々の想いがひとつのカタチになって生まれました。1995年1月17日、阪神淡路大震災があった翌年、神戸で「音楽」での復興支援実行委員会が立ち上げられ、1999年から女優の竹下景子さんが出演、朗読する「竹下景子」詩の朗読と音楽」が始まりました。

東日本大震災を受けて、この企画は、アーツエイド東北に引き継がれ、2012年3月に仙台で第1回開催。2013年以降は、実行委員会、東北大学災害科学国際研究所が主催となり現在に至ります。

神戸では、詩を一般公募しています。

したが、東北では、災害科学国際研究所「みちのく震録伝」が収集・整理・保存した膨大な口述記録(オーラル・ヒストリー)の中から、後世へ語り継ぐ記憶・教訓を学術の観点から選り出しています。この口述記録をライターによって、詩のかたちへと落とし込み、語り主と何度もしらべ、詩編として出来上がっていきます。本番では竹下景子の語りや音楽が加わり、いわば災害科学という〈学術〉と〈文化芸術〉が融合した事業になっています。これらの詩編は、防災減災教育としてのメッセージ、記憶風化への楔、新たに生まれる課題、時の経過をしっかりと受け止め伝えていくものです。今年の「かたりつぎ」は、福島県白河市の「ミネス」で「かたりつぎ」朗読と音楽の集い」として紹介されます。



2016年開催「かたりつぎ」仙台市宮城学院女子大学にて  
背景画は加川広重「EKUSHIWA」  
©撮影・志賀野桂一



## 【鳥取県】

野崎淳 「倉吉未来中心」館長



アトリウム吊天井落下物

2016年10月21日午後2時7分に鳥取県中部を襲った震度6弱の地震は、我々の管理する劇場「倉吉未来中心」にも大きな被害を残してしまいました。正面玄関エントランスの吊天井の崩落、大ホール吊物機構の損傷など、劇場の機能はすべて停止しましたが、鳥取県の積極的な対応により、少しずつですが復興に向かっていきます。このとき、アートの世界に起こったこと、劇場の職員が感じたことを、少しでもお伝えできればと思い、筆を取らせていただきます。

この地震の被害により利用者はもちろん、我々の企画する主催公演もいくつかが中止となりました。「東京バレエ団くるみ割り人形公演」「茂山家HANAGATA狂言」など。そんな中、我々の心を暖めてくれたひとつの新聞記事を紹介いたします。

そうだ、5歳の孫娘は冬が大好き。クリスマスプレゼントに東京バレエ団の「くるみ割り人形」を見せてあげよう。ばあちゃんが高価なチケットを2枚買いま

した。そして2人は「早くクリスマスにならないかなあ」と公演の日を待っていたのです。地震後のある日「ホールは地震で壊れてしまった、バレエは見られないんだって」。驚いて大きく開いた孫娘の瞳が、見る見るうちに潤んできました。ばあちゃんだって泣きたい気持ちです。(中略)でも仕方ありません。早く町もホールも元の姿に戻りますように。がんばって！ 未来中心。

その後、この記事を見た東京バレエ団から送られたすべてのキャストのサイン入りプログラムを自宅にお届けしました。

使えなくなつて、観られなくなつてわかる、劇場やアートの力と役割を感じた瞬間でした。今、我々は「softにちゅうぶ元氣プロジェクト」というコンセプトを共有し、場所はなくてもできることをやっていること、アウトリーチを中心に、地域の方々に元気を届けようとしています。



元氣 P Vn コンサート

## 【熊本県】

河野ミチユキ

劇団ゼロソー代表／「花習舎」運営

熊本地震震源地の益城町のすぐ西隣、熊本市健軍の「花習舎(カシューシヤ)」はキャパ20名程度の小さなアトリエですが、演劇だけでなく音楽ライブ、各種ワークショップ、アイドルイベントなどご利用いただいて今年で2年目になります。

震源地で震度7を観測した地震を立て続けに2度受けた花習舎は3階建てのビルの最上階にあります。幸いにして建物自体はわずかな損傷に留まりました。続く余震の中、壊れてしまった備品などの修繕作業へ。県内外から花習舎に心配の声を寄せいただき、また作品を花習舎に持って来て上演してください。

ことで震災から2か月後には再オープンに漕ぎ着けました。地震からひと月経った頃、熊本の演劇人有志が集まってできた「SARCK」という被災者支援団体の事務所兼会議室として、過去の震災を経験なさっている方々からお話を聞く場などとしても活用されています。

オープン初年度から秋に開催している「カシューナッツ12帖演劇祭」が震災直後の悩みでありました。開催するべきか、も

含めて。ところが、クラウドファンディングと全国からお送りいただいた義捐金で、県外2団体+県内2団体の作品上演と各種関係イベントを1か月に渡り開催することが出来ました。

やがて地震から1年。正直なところ、まだまだ花習舎の周囲は文化よりも生活の復興が先です。「少し落ち着いたから久しぶりに演劇でも見たいな」の声が上がるところに「以前と同じように演劇がある街でありたい」を信条に、少しずつイベントを増やす活動に精を出していきます。皆様是非一度熊本に遊びに来てください！

### 工藤慎平

劇団夢棧敷所属／「男女共同参画センター」はあもにい」管理・運営

熊本市中央区にある「男女共同参画センター」はあもにい」にはメインホールと多目的ホールという小規模ホールが2つあります。2つのホー

本震後の花習舎の様子



避難所になった「はあもにい」貸室の様子



ルとも、先の地震で損傷、閉館を余儀なくされました。ホール以外のリハーサル室など十数部屋の貸室には幸い大きな損傷はありませんでしたので当初はすぐに運営再開と考えていたのですが……熊本市からの要請で、5月8日より避難所としての運営を開始しました。我々職員もボランティアの方々と一緒に無事な貸室を利用した避難所の設置・管理・運営、並行して1階ロビーを利用した音楽・ダンスなどの慰問イベント、自主事業として防災講座の実施や、男女共同参画の視点から他の避難所の環境改善に努める活動なども行いました。

6月5日に多目的ホールが再開した当時、県内ホールはほぼ開いていませんでしたので、本当に沢山の団体の方々とやりとりをさせていただきました。中にはスケジュールや会場の仕様上の問題で開催を断念された方もいらっしゃいました。しかし我々スタッフも限られた環境の中でもなんとか開催をしていただけの様な出来限り尽力しました。公共ホールのスタッフはあくまで管理の立場であるとは言え、そこに収まってしまつてはいけないという思いが個人的にあつたからです。時には出過ぎた事をしてしまったかも知れませんが、心が復興に文化活動が必要なのに、芸術文化はどうしても後回しになってしまつてしまつていく傾向に負けたくなかつたのです。

今年の4月から県内のホールも少しずつ再開していく予定ですが、今後もどんな形であっても多くの文化が熊本で生まれ、復興につながる事を願います。

# アジア 青空劇場フェスティバル 2016 in KURUME

2016年9月19日～25日

会場：久留米シティプラザ（六角堂広場、スタジオ）、KUHON Café  
 企画・運営：アジア青空劇場フェスティバル実行委員会（山田恵理香、五味伸之、山下キスコ、谷岡紗智、石田聖也、重松輝紀、田村さえ、日下部信、田坂哲郎、木村佳南子、大場久路、児島理華）  
 制作：高橋知美、（海外担当）横山恭子  
 主催：一般社団法人日本演出者協会  
 共催：久留米シティプラザ、「小劇場・大戯劇」アジア交流会委員会（Small Theater Big Drama' Asia Forum Committee）、上海市閔行區戯劇工作者協會（Shanghai Theatremaker Association）  
 協力：アートマネジメントセンター福岡  
 後援：公益財団法人久留米観光コンベンション国際交流協会、KUHON Cafe、久留米市日中友好協会、ハッピーママくらぶ

## 報告Ⅱ曲飛スエヒ（香港）評論家

「アジアで世界の舞台芸術家とふれあう」をコンセプトに、アジアの舞台芸術家たちによって初開催された「アジア青空劇場フェスティバル2016 in KURUME」。



テーブルトークシアター



韓国の屋台



日本の屋台

2016年の福岡開催を皮切りに中国・韓国・マレーシアなどアジア圏の各都市と連携し、アジアを舞台芸術で繋げることを射的に入れて企画・運営した。「劇場から街へ、街から劇場へ」を言葉にして、どこまでも境目なく続く青空のように年齢、経験、国籍を問わず交流を深める良い機会となった。

1980年代以降、アジアには様々な演劇を

祭りが起った。例えば「烏鎮国際演劇祭」「アジア民衆演劇祭」「華文演劇祭」など。昨年9月の「アジア青空劇場フェスティバル」は7日間開催されたが、質や量から評価しても、優れた演劇祭だと思

う。この「アジア青空劇場フェスティバル」では、北京、上海、台湾、香港、韓国、日本の演出家、劇作家、俳優、制作者や学者が集まり、さまざまな上演と交流を行った。だが、もしフェスティバル／トーキョーまたは世界演劇祭「利賀フェスティバル」のような効果を目指しているとしたら、それにはまだまだ長い道のりだ。

久留米シティプラザの広場をメイン会場に設定し、様々な公演や交流イベントを行った。屋台演劇、青空演劇、ワークショップ、「ピクニック」交流など、「演劇」とは何かを考える場所となった。屋台演劇部門は全体的に芸術性に優れ、技術や発想も良く出来ている。弱点としては、広報が足りていない。地元メディアの協力も不足している。演劇祭代表者の一人である山田恵理香氏は「中心になっている実行委員は主に表現者で、専門の制作者が少ないため、今回は困難だった」と述べていた。次はかならず多くの制作の専門家を実行委員に入れる必要がある。

アジア演劇の長期的な方向性を考え、アジア版のエンジンプロジェクト「アジア青空劇場フェスティバル」は久留米市や福岡県、日本政府からの全面的な協力が必要となる。■



ワークショップ

## 報告Ⅲ山田恵理香

アジアで世界の舞台芸術家と触れ合うフェスティバルとしてブレ開催を行いました。劇場から街へ、街から劇場へ」をコンセプトとして、どこまでも境目なく続く青空のように年齢・経験・国籍を越えて演劇を体験し交流できる場をめざしています。プログラムの中心を観劇ではなく創作体験や講座に置いているのも特徴のひとつです。福岡県久留米市にオープンした「久留米シティプラザ」を会場とし、久留米市主催「めぐるめく演劇祭」も同時開催されました。アジア青空劇場フェスティバルには観劇のみのプログラムは無い為「めぐるめく演劇祭」の上演作品を参加者が観劇しアフタートークに参加するなどの交流をしました。今年度のテーマ「意志のある劇場をつくる」に基づいて、会場にある市民に解放されている半屋外スペースに屋台を並べ作品を創作・上演しました。屋台を劇場と捉えて、台湾・韓国・香港、日本の「演劇屋台」ができあがり、はじめは遠巻きにいた演劇に馴染みのない人々が次第に屋台の席についていく様子が見られました。香港の雨傘革命をモチーフにした作品や、韓国からの講師である朴烈烈氏が創作した個人の出来事を劇

にして観客に提供するなど、街頭でありながら密接な関係となる屋台ならではの効果がありました。反省点としては屋台の使用方法を比較的自由設定とした為、屋台が劇場というより舞台美術という位置づけになる発表もあり、オープンスペースでの上演形態と差異がみえない部分もありました。国際交流を行う場台はできる限りのをしほっておく事でより深く有意義な交流となることを再確認しました。シーワン（上海）氏と五味伸之（福岡）氏の共同演出ワークショップ「おひとりさま」の演劇では、演劇における観客の役割について再考察する場として参加者・観客から好評を得ました。後日、マレーシアに戻った参加者と同じ企画を地元で上演した程です。また、初日に行ったテーブルトークシアターは、屋台に模造紙を設置し様々な言葉を駆使しながら絵や文字を書いて「劇場」について話し充実した時間になりました。これから、ゆっくりにしっかりと中身の濃いフェスティバルに育てていきたいと思えます。■



集合写真



新連載コラム

文：藤間健

# 演出者と法律

## 第1回「演出した作品は誰のもの？」

我々演出者が創作・上演活動をする上で、常に隣り合わせにある「法律」。しかし近年、権利問題による上演中止が話題となり、「理解しているようで理解できていないこと」の多さに気づき始めた人も多いのではないのでしょうか。

そこで今号より、演出者でありながら法律を学んできた藤間健氏のコラム「演出者と法律」を連載開始しました。法律への理解度を深めることで、安心して創作・上演活動に臨める演出者が増えることを願って。(編集部)

### 舞台作品の著作権とは

私たち演出者は、作品を上演する際、作品名と共に、自分の名前を表記します。皆さんはこれをどのように捉えているのでしょうか。「自分が創ったんだ！」という思いで、当然のこととして表記してはいませんか？ところが作品を観て下さる方々にとっては、沢山の劇場に通い、数多くの作品を、長年に亘って比較してきた方でない限りは演出者の名前などは、全く興味の無いものです。

その理由は、私たちの仕事は俳優や美術の仕事とは違って、お客様の目に直接見えるものではないからです。では、敢えて記名することで、演出者は何をできることができるのでしょうか？

さて、ここで皆さんに確認します。この場合、作品の《著作権》は誰にあるのでしょうか？

私が学んだ法律の世界では、自分で脚本を書いた人のことを著作者と呼び、その作品をこの人の知的な財産として認めます。つまり演出者であっても、なくても《著

作権》は持てるのです。逆に、他者が創作した作品を元に、演出のみを行った場合は、この権利を認めません。

では、何か月もの間、汗水流してようやく上演を迎える私たちの日々は、お客様からの拍手以外には、何も報われる手だてが無いのでしょうか？

### 自分だけにしか出来ない表現

日本の著作権法の中には、《著作権隣接権》(著作権法第89～90条)と呼ばれる条文があります。ここで押さえておきたいのは《著作権》では無い、ということですが、その隣接権の内には、先に例を挙げた、自分の名前(芸名も可)を表記する権利《氏名表示権》(第90条2・1)があります。また、私たち演出者は、同じ脚本を利用しても、ひとりひとりが違った表現を創りだすことが出来ますが、これらひとつひとつの作品に価値を見出し、誰にも真似出来ない「自分だけにしか出来ない表現がこれだ！」と主張出来ることを《同一性保持権》(第90条3・1)といえます。この2つを併せて《美演家人格権》といい、演出をするという行為が認められています。余談ですが、演出者という言葉は、法律上は存在しません。音楽を演

奏する人も、手品師も、放送に携わる人もその他、皆同じく《実演家》と呼ばれます(詳しくは、後日)。

### 記録映像が欲しい

また、お客様から「記録映像が欲しい。」と言われた経験はありませんか？逆に「舞台作品は消え物だから…」とカッコ付けたことはありませんか？同時に、それを自分自身が記録したいと思った事はありませんか？また、記録してしまったことで、生の作品と全く違った印象になり、愕然としたり、新しい発見をしたことはありませんか？これらに関することは《録音権および録画権》(第91条)として、記録をすることも、しないことも、またそれを第三者にさせることも、させないことも、私たちの判断に任されています。たまに、公共の電波に載せられて演劇作品が放送されること

があります。これには《譲渡権》(第92条)が有効で、許諾することも拒否することも、91条と同じく自分の判断で出来ます。

### 演出者は著作権を持てるのか

このように、日本の著作権法は1970年の制定以来、数度にわ

たり改正が行われ、私たちの権利が護られるよう進化してきています。新しいところでは、ネット社会に対応するためであったり(註1)、国際条約との整合性を図るためであったり(註2)と、その理由は様々です。

今回挙げた項目は著作権法の一部に過ぎませんが、演出者は著作権を持てるのか？という、ささやかな疑問を持つだけでも、法律的な見方をすることで、私たちはそれらに守られつつ、実社会の中で作品を創り、世の中に発表しているのだということに共有出来たと思います。

日本演出者協会は、正会員として公益社団法人日本芸能実演家団体協議会(芸団協)へ加盟しています。創作にあたり、気になることが生じた際には、芸団協又は協会法務部まで、いつでもご相談下さい。

註1 「著作権法の一部を改正する法律」

(平成21年法律第53号、2009年6月12日成立、同年6月19日公布)

註2 平成26年法律第35号、2014年

5月14日成立

【広報部】

昨年の『D』第15・16号合併(7スベシャル号)に続き、今回もスペシャル号②として、前回同様30ページでお届けすることになりました。

演出者として各々が現場を抱えながらの部会開催や編集作業は思うようにいかないことも多いのですが、ご多忙な中をご協力・ご執筆いただいた方々の想いを1人でも多くの人に届けたい!という気持ちが原動力になっています。

本格的な運用開始からはまだ1年弱のFacebookページも、全国の協会員からの文字数・写真枚数に制限のない「現地報告」が功を奏し、記事によってはフォロワー数を上回る「いいね」をいただくことも増えてきました。今後も協会員の皆様と一緒に、協会事業へ興味を持っていただくためのツールとして、大事に育てていけたらと思っています。(秋葉田美子)

【教育出版部】

ミュージカルの演目が多くなる中、我が国のミュージカル専門の研究書や演技演出の専門書が少なく、プロを指す演劇人にとって、教育環境が整備されていない。この数年その解決策としてミュージカル演技という専門書を発行するべく準備中であるが、近年の出版不況で未だ発刊できていない。

また、小学校教育に「演劇」を教科として取り入れるための「演劇教科書」発行に関しては、多くの機関で検討されているが、発行する機関として最も

適している日本演出者協会が、責任を果たさなければならぬのではないのか。この為の計画立案など早期に実現しなければならぬがまだ進んでいないのが現状である。

ただし、多くの機関がそれぞれ独自に研究開発を進めている中で、数年後には「演劇教科書」が完成するのは確実である。教育出版部も小学校及び中学校や高校教員との話し合いを進めている。(篠崎光正)

【日韓演劇交流センター】

日韓演劇交流センターは、日本演出者協会をはじめ演劇関係7団体から2名ずつ計14名の委員、そして韓国の演劇事情に詳しい10名程の専門委員によって運営されています。

私は2年前から日本演出者協会の代表として派遣されています。

2002年から、お互いの国の優れた劇作家を紹介しあう活動を行っており、隔年で相互の国でドラマリーディングを開催しています。2016年度は、今年の1月に座・高円寺で行われた「韓国現代戯曲ドラマリーディング vol.18」の準備が主な活動でした。

韓国側から推薦された10本ほどの戯曲の中から、委員会が3本にしぼり演出家を公募。やはり十数人の応募の中から3名の演出家を選び、俳優のオーディションを経て、1月に無事開催することができました。

演劇という文化を通して、日韓交流の一助になればと思い活動しています。(シライケイタ)

【事務局】

雨にも負けず、新宿のビル風にも負けず、理不尽な要求にも負けぬ丈夫な身体を持ち、いつも笑っている。

一日に多くのメールや電話でやりとりし、書類を作り、あらゆることをよく見聞きしわかりやすくして忘れず、芸能花伝舎の中の小さな事務所に居て、東に若手演出家コンクールあれば行って応援し、西に近代戯曲研修セミナーあれば行って盛り上げ、南に国際演劇交流セミナーあれば行って学び、北に演劇大学あれば面白いから他でもやろうと言いつつ、

会員が増えれば涙を流し、会費未納にオロオロ歩き、皆に毎月DMを送り、褒められもせず、苦にもされず、協会事業が円滑に進むよう、日々務める、(荒川貴代)

広報部員募集

協会誌『D』の編集、webでの広報など、興味がある方は協会事務所までお問い合わせください。

ジェイソン・アーカリ



アーカリ・シアターカンパニー主宰。英国で最も有名で

歴史のある演劇大学のとひとつ、ローズ・ブルフォード大学で12年間、俳優訓練と演出を教え、学部長も務めました。2009年に来日し、俳優訓練・演出活動をしています。主な演出作品は『マウストラップ』(六本木ブルーシアター)、『サスペンスオムニバス』(三越劇場、博品館劇場)、『マクベス』(兵庫県立芸術文化センター)、『尼さんと狂人』(有明教育芸術短大ホール)。アーカリ・シアターカンパニーでは、現代ヨーロッパの俳優訓練メソッドを使ってヨーロッパの戯曲を翻訳し、身体的、視覚的、音楽的、文学的表現を融合した新しいスタイルの舞台を、日本の俳優とともに創り上げます。

藤間健(ふじま けん)



1984年生まれ。東京都在住。中央大学法学部卒。夢

劇代表。フランス演劇クレアシオン代表。劇団C.A.M.代表。公益社団法人国際演劇協会(IICTNESCO)日本センター会員。日仏演劇協会会員。NPO法人ベタアートネットジャパン理事。翻訳家であり演出家である岡田正子氏に師事。心理描写を大切にされた演技指導、演出には定評がある。2009年、東京都多摩市の招聘を受けて総合監督、演出を務めた『創作音楽劇アンネの日記2009』には多くの再演希望が届いている。2012年震災復興祈念明日への輝望プロジェクト「ふくしま・みんなの演奏会」西本智実さんと共に「」では実行委員として演出・舞台監督を務めている。

工藤舞(くどう まい)



秋田県出身。大学進学を機に北海道函館市へ移り、北海道教育大学演劇部、エンターテインメント集団「TEAM亀」、函館市内アマチュア劇団「G4」などを経て、2015年、主宰団体「Mike堂」を旗揚げ。脚本・演出を務め、公演毎に役者を募って上





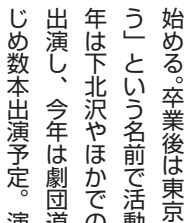
**青木哲也**（あおき てつや）  
1955年生まれ。ロックやジャズに傾倒する学生時代に演劇と出会う。2001年、当時出版の仕事に携わったつら劇団「サンハロンシアター」を旗揚げ。主宰として舞台の脚本及び演出を担当する。代表作としては、脳死による臓器移植を描いた『いのちフル』、性同一性障害を扱った『かみん』、裁判員制度と里親制度をテーマとした『早足の夕暮れ』など、社会問題をテーマとした作品。一方、戦前戦後の音楽シーンを描いた『上海、そして東京の屋根の下』や『ロカビリーに恋をして』など、生バンドを入れたエンターテインメント性の高い作品も手掛ける。

演ずるスタイルで作品を発表している。2015年、札幌市教育文化会館主催「教文短編演劇祭」に『TORUS』で出場。函館市を中心に、北海道で活動している。現在は秋田県秋田市に居を移し、秋田市でも活動中。2017年、「神奈川かもめ短編演劇祭」公募短編戯曲に選抜され、『あしたのこと』が赤澤ムック氏演出のもと上演された。



**千葉さらだ**（ちば さらだ）  
UNIT-Salada  
主宰・役者・演出者  
劇団ボブ

**菅田華絵**（すがたかえ）  
劇団俳優座  
文藝演出部  
所属。横浜市出身。日本女子大学  
英文学科卒業。2008年に『マンザナ、わが町』（作：井上ひさし）を演出した後、劇団俳優座演劇研究所に入所。2013年に劇団俳優座文藝演出部新人発表会『ハサミ、紙、石（じゃんけんぼん）』（作：ダニエル・キーン、翻訳：佐和田敬司）、翌年『フューリアス〜猛り狂う風〜』（作：マイケル・ガウ、翻訳：佐和田敬司）とオーストラリアの戯曲に取り組んでいる。また、『象』（作：別役実）にて別役実フェスティバルにも参加。いろいろな作品に挑戦していきたいと思っています。皆様、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



**たくりゆう**  
中国・湖南省出身、1991年生まれ。2012年、留学で来日し大阪に留まる。2016年、専門学校東京アナウンス学院・放送声優科卒業。在学中、日本で人生初の舞台『海峡の光』中村獅童主演）を観劇し、その魅力に惹かれ学校内での演劇活動を始め。卒業後は東京で「たくりゆう」という名前でも活動を継続。昨年は下北沢やほかでの舞台上に3本出演し、今年は劇団道学先生をはじめ数本出演予定。演出の経験はないが、いつか自分の伝えたいものを「形」にしたい。素晴らしい芸術ほど人々や世界を変えられる巨大な力を持っている。そう信じてより素晴らしい芸術を目指して活動が続いている。

地方発の「面白い」を模索、身近に提供できる場の創造を目的にUNIT Saladaを立ち上げ短編オムニバス公演『BOREDOーあなたの境界線は何ですか？』『COLORー個性と戦う価値観ー』を演出&プロデュース。また、月一回「戯曲を読む会」などの活動をしています。まだまだ勉強中ですが、どうぞよろしくお願ひします。

**三好康司**（みよし こうじ）  
東京の団体、劇団  
MATHOR  
OBAR代表。  
2008年に劇団を立ち上げ、舞台を中心に活動中。欧米・東南アジアへの長期滞在・生活経験を有することから、英語及び生活に困らない程度のインドネシア語も扱う。インドネシア滞在時には、日本文化を題材にする現地の劇団の演技指導・運営支援を行う中、剣文化を伝承・継承している日本の団体を引き合わせ、想像以上の化学反応を目の当たりにする。当該経験から、国内外のヒト・モノを繋げることによる可能性の広がり強く信じている。宜しくお願ひ致します。



**福島敏朗**（ふくしま としろう）  
テトラク  
ロケット  
主宰・演出者  
劇団で演

劇に出会い、演者から演出に興味を持つ。卒業後、演出の仕事としてCM業界に就職、CM演出家となる。並行して、2001年から6年間、学生劇団OBを中心とした社会人劇団で脚本演出として活動。2010年、WOWOWシナ

**退会**  
横田翔 川口俊和 金森健一  
今井夢視 西川好弥  
金剛寺照五郎 平山勝  
樋口圭介 勝俣美秋 平石耕一

**退会・訃報**  
吉川徹 畑野稔 里吉しげみ  
八田満穂 高橋清祐 山田善靖

リオ大賞受賞をきっかけに、オペラ、ミュージカル、コンサートなどの脚本を手がける。演出家としては、2013年、身体表現から発する演劇を目指す、テトラクロマットを旗揚げ。2013年『銀河麻線』、2014年『花の下にて』、2016年『風は垂てに吹く』を上演。今後、色々な演出も手がけていきたいと思っております。どうぞお見知り置きください！  
テトクロ公式サイト  
<http://tetrachromat.net>

## 写真で振り返る 日本演出者協会の軌跡



2015年4月で設立55周年を迎えた日本演出者協会。前号の『D』では協会の略年譜を掲載いたしました。今号では、昨年の「演出者の集い2016」で多数の協会事業の写真を披露してくださった協会評議員の貝山武久さんから、『最も古い』一枚の写真を元に、かつての協会についてのお話を伺いました。

### 「清里村、夏の演劇大学の頃」 貝山武久

日本演出者協会は1960年、演出者の地位向上と相互交流を目的として創立された、と協会小史にある。その後長期に渉る活動の休眠を経て1974年に再発足されるわけであるが、私の記憶に残るのはこの再発足以降の協会である。村山知義理事長の逝去に伴い、新しく千田是也理事長が誕生、事務局長はふじたあさやさんであった。事務局といっても現在のように自前の事務所を持たない、当時新宿駅近くにあった新劇団協議会に事務委託する状況であった。それでも志だけが高く、皆で知恵を絞って出てきたのが「夏の演劇大学」であった。山梨県清里村の清泉寮に毎年各地から受講者が集まり、千田学長のもと2泊3日の合宿をした。当時のこと故、国からの助成などなく受講料で一切を賄った。内容は、ふじたあさやさんが中心となり同一素材をミュージカル風、狂言風、現代演劇風とに描き分け、受講者が夫々希望するグループに参加、最終日に千田学長による講評が行われた。講師陣は狂言のふじたさんとミュージカルの中村喙夫さんがほゞレギュラーで、現代演劇については随時協会員を推薦、私も何回か参加した。基礎訓練に当たったのは永曾信夫さんであった。合宿というスタイルが参加者の心を一つに結ぶのか、毎夏盛り上がりを見せ、神戸や仙台でも開催された。今日、全国各地で開催される「演劇大学」の魁となった。この写真は1980年の、私にとって最も古い日本演出者協会の写真である。

### 主編集後記

▼直接顔を合わせて対話することの必要性和楽しさを、「演出者の集い」で再認識。全国の協会員と出会いたい！芝居の話がしたい！  
(秋葉由美子)

▼このところ、演劇鑑賞団体の衰退が行き着くところまで行ってしまった。なんとかしなければならぬ。協会も身を粉にして団体へのボランティア活動を推進し、演劇総体の衰退を止めなければ、若手の育成にも多大な影響が出てくるのではないか。  
(篠崎光正)

▼自宅前の公園の十五か月に及ぶ改修工事が始まる。樹齢百年以上の樹木が次々に伐採される。喪失感、そして工事の必要性に疑問あり。  
(篠本賢一)

▼若手演出家コンクールは規定に合わせて皆がお芝居をコンパクトにするので「お弁当作りみたいだな」と思っています。  
(三谷麻里子)

▼今回のアンケートは個人的にとっても興味深いものでした。不慣れなもの、非合理的なものどされつつあるアナログの可能性をもっと掘り下げていきたいです。  
(緑川憲仁)

▼東京と地方の演出家が以前より近くなったと感じると共に、日本の演劇の未来を日本で考える時期なのではないかと思う。  
(乗原秀一)

▼広報部に入り初めての編集作業は、色々わかりませんでした。先輩方に教えて頂き、なんとか出来ました。本当に感謝の気持ちです。  
(藤間健)